REPORT

平成30年度 おかやま文化芸術アソシエイツ調査研究事業

「文化芸術交流実験室」報告書

平成30年度 文化庁 文化芸術創造拠点形成事業

公益社団法人 岡山県文化連盟
おかやま
文化芸術アソシエイツ

O·BUN·REN

文化庁

おかやま文化芸術アソシエイツ

岡山県文化連盟が持つ既存のネットワークを生かして、岡山県の各地域で生活する我々がその地域の文化を構成する資源（ヒト、コト、場所、お金等）についてよく知り、地域の未来を見据えた新たな価値の創造と多様なステークホルダーの共生について思考するために、平成29年度から始動した地域アーツカウンシル機能です。プログラム・コーディネーターを迎え、以下のような取り組みを実施しています。

1. 東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた文化プログラムの周知、参画の促進及びbeyond2020プログラムの認証
2. 文化団体等の活動に対する助言、支援
3. 調査事業の実施
4. 文化活動に係る研究会、勉強会、講演会などの実施

本書では、③県内の文化芸術資源を発掘、再評価、活用するための 調査事業の一環として実施した「文化芸術交流実験室」のレポートと、そこから得られた情報を中心に平成30年度の取り組みを中心に報告します。

実施体制

主催　おかやま文化芸術アソシエイツ（公益社団法人岡山県文化連盟）・岡山県
平成 30年度文化庁 文化芸術創造拠点形成事業

プログラム・コーディネーター　大月ヒロ子

事務局（公益社団法人岡山県文化連盟）　岡野千鶴、高田佳奈、濱野舞、神原隆兵、切石弘子

運営協力　IDEA R LAB、一般社団法人ノマドプロダクション、木下志穂

協力　岡山県立美術館、岡山大学大学院教育学研究科赤木里香子研究室（第 6 回）、岡山県立大学、KakaraWoolworks（第 7 回）、岡山市民会館、山陽放送株式会社、岡山映像ライブラリーセンター、公益財団法人岡山市スポーツ・文化振興財団、建築家の仕事実行委員会（第 10 回）、総社市人権・まちづくり課、総社インターナショナルコミュニティー（第 13 回）、倉敷市住宅課（第 14 回）、公益財団法人福武財団（第 15 回）、岡山後楽園、ソウルデザイン財団（第 17 回）

大月ヒロ子

(有)イデア代表取締役
一般財団法人地域創造 公立美術館活性化事業企画検討委員、キッズデザイン審査員

板橋区立美術館学芸員を経て独立。1989年、ミュージアムづくり、展覧会監修、遊びと学びの空間デザインを行う(有)イデアを設立し、数多くの公立ミュージアムの設立・運営に関わる。2013年に日本初のクリエイティブリユースの実験室IDEA R LABを倉敷市玉島オープンし、国内外でプロジェクトを展開している。「まるをさがして」他、著書多数。

文化芸術交流実験室

岡山県内の優れた文化・芸術資源の掘り起こしや、その価値を県民の皆様に再認識していただけるよう、調査研究事業を行いました。
調査の過程で得られる新たな情報や人材データをもとにして、文化・芸術と他分野との連携による新たな取り組みの提案や、ソーシャルインクルージョンの視点も盛り込んだレクチャーとワークショップを定期的に開催し、県内の人材や文化資源の領域横断的な出会いの場の創出とネットワーク構築を目指しています。
この実験室に期待するのは、文化芸術コミュニティー内での交流はもちろん、福祉や教育、まちづくりなど様々な分野との交流に文化芸術の創造性を生かした新しい取り組みが始まり、すべての人が文化芸術を楽しむことができる岡山が生まれることです。

※第1回～第5回は平成29年度に実施

第6回　画材から見る日本の絵画

日時｜2018年4月28日（土）11：00～16：00
開催地｜岡山県立美術館（岡山市北区天神町8-48）
講師｜森山知己（日本画家、倉敷芸術科学大学 教授）
　　降旗千賀子（目黒区美術館 学芸員）
　　岡本裕子（岡山県立美術館 主任学芸員）
参加者数｜47名

第7回　糸紡ぎから広がる世界

日時｜2018年5月19日（土）11：00～17：00　※映画『YARN 人生を彩る糸』上映15:00～16:15
開催地｜岡山県立大学（総社市窪木111）
講師｜青島由佳（Kakara Woolworks 主宰）
　　難波久美子（岡山県立大学デザイン学部造形デザイン学科 教授）
参加者数｜54名

第8回　文化芸術の仕事で生きる

日時｜2018年6月2日（土）11:00～16:00
開催地｜Jテラスカフェ（岡山市北区津島中1-1-1）
講師｜ 矢萩多聞（画家、装丁家）
　　川埜龍三（芸術家/無職）
　　柏原拓史（NPO法人だっぴ代表理事）
参加者数｜41名

第9回　音楽と絵と映像と

日時｜2019年1月13日(日) 11:00～16:00　※豪雨災害のため2018年7月16日から振替実施
開催地｜倉敷市立美術館（倉敷市中央2-6-1）
講師｜ トウヤマタケオ（音楽家）
　　nakaban（画家）
　　当真伊都子（ピアニスト、ボーカリスト、コンポーザー）
参加者数｜42名

第10回　建築探偵団 其の壱『会館』

日時｜2018年8月25日（土）11:00～16:00
開催地｜岡山市民会館（岡山市北区丸の内2-1-1）
講師｜ 石田尚昭（建築家、岡山市スポーツ・文化振興財団 常務理事）
　　弥田俊男（建築家、岡山理科大学工学部建築学科 准教授）
参加者数｜36名

各回の内容をまとめた広報用リーフレット
（デザイン：川路あずさ）

各回のゲストがテーマに応じた事例紹介などを
行うレクチャー

対話から体験まで、学びを身体化するワークショップ

食事をする時間も設け、じっくりと参加者同士が交流

第11回　文化を伝えるグラフィックデザイン

日時｜2018年9月29日（土）11:00〜16:00

開催地｜IDEA R LAB、TAMAYA TAMASHIMA（倉敷市玉島中央町3）

講師｜黒田武志（アートディレクター、造形作家）
川路あずさ（アートディレクター、デザイナー）

参加者数｜34名

即興で音楽・絵・映像を奏でる体験も（第 9 回）

第12回　海から見る岡山

日時｜2018年10月20日（土）11:00〜16:00

開催地｜松島分校美術館（倉敷市下津井松島2563）

講師｜高原次郎兵衛正伸（建築家、うなぎ漁師）
在間宣久（前岡山県立記録資料館 館長）
加瀬野久志（船模型製作家）

参加者数｜33名

廃材を活用したワークショップ（第 11 回）

第13回　岡山の中の異文化コミュニティー

日時｜2018年10月28日（日）11:00〜16:00

開催地｜きよね夢てらす（総社市清音軽部666-6）

講師｜譚俊偉［タンシュンワイ］（総社市役所 市民生活部 人権・まちづくり課 国際・交流推進係）
大橋香奈（研究者、慶応義塾大学大学院政策・メディア研究科助教）

参加者数｜36名

児島港から松島へ渡った（第 12 回）

第14回　建築探偵団 其の弐『団地』

日時｜2018年11月3日（土・祝）11:00〜16:00

開催地｜住吉町の家 分福（倉敷市中央2-13-3）、老松団地（倉敷市老松町3-2-1）

講師｜石田尚昭（建築家、岡山市スポーツ・文化振興財団 常務理事）
菊地マリエ（公共R不動産 コーディネーター）

参加者数｜21名

シリーズ展開した建築探偵団

第15回　価値を紡ぐプロジェクトアーカイブ

日時｜2018年11月16日(金)19:00〜21:00　※翌17日（土）に直島でアーカイブ見学会を開催

開催地｜東山ビル（玉野市宇野1-7-3）

講師｜金廣有希子（公益財団法人 福武財団 アーカイブ・セクション リーダー）
多田智美（編集者、株式会社MUESUM 代表）
橋本誠（アートプロデューサー、一般社団法人ノマドプロダクション 代表理事）

参加者数｜35名

平日夜にも実施（第 15 回）

第16回　アーティストが作った料理 作家が作った料理

日時｜2018年12月1日（土）15:00〜19:00

開催地｜クレド岡山（岡山市北区中山下1-8-45）

講師｜杉本克敬（バリスタ、ネイバーキッチン主宰、EXCAFE 代表）
新藤信（日本パウル・クレー協会 代表）

参加者数｜28名

後楽園内の建物で開催した第 17 回

第17回　芸術文化の今 ソウルと岡山

日時｜2018年12月24日(月)10:00〜15:00

開催地｜岡山後楽園 鶴鳴館（岡山市北区後楽園1-5）

講師｜多田淳之介（演出家・劇作家）
劉誠子［ユーソンジャ］（（ソウルデザイン財団）

参加者数｜27名

文化芸術交流実験室06

画材から見る日本の絵画

日時：2018年4月28日(土)11:00～16:00
開催地：岡山県立美術館（岡山市北区天神町8-48）
講師：森山知己（日本画家、倉敷芸術科学大学 教授）
降旗千賀子（目黒区美術館 学芸員）
岡本裕子（岡山県立美術館 主任学芸員）

水彩絵の具や油絵の具には触れることがあっても、岩絵具を使う機会はほとんどない人が多いはず。屏風や掛け軸に使用されている画材を紐解き、自分で作り、使ってみれば、画材が土地の恵みと密接に繋がっていることがわかります。五感を働かせて画材と向き合うと、表現の仕方も変わってくるかもしれません。岡山県立美術館には、画材はもとより制作の過程までわかる画材ボックスがあります。ワークショップでは、描くことのない人も、十二分に楽しめる素材体験をします。

森山知己…国の名前の付いた「日本画ってどんな絵だろう?」という素朴な疑問をエネルギーに、絵具や和紙などの素材、筆や刷毛などの道具、それらの使い方、古くからある技法を手がかりに、実際に試し描いて探している。

降旗千賀子…美術館の教育ツール「画材と素材の引き出し博物館」、展覧会&ワークショップ「色の博物誌展」を企画。2016年には展覧会「色の博物誌－江戸の色材を視る・読む」で国絵図と浮世絵を取り上げ、江戸時代の透明・不透明な色材について紹介した。

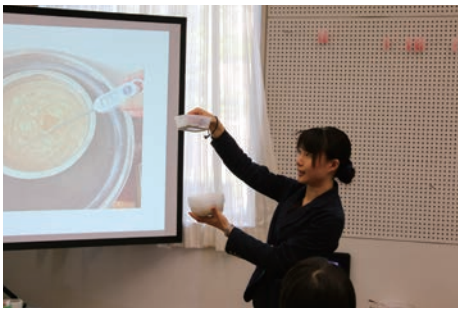
岡本裕子…岡山市生まれ。筑波大学卒業後、中学校教諭を経て 2008年 4月より現職。多様な体験型プログラムや、障害の有無に関わらず使える「美術館教育素材」の開発、それらを活用したプログラムを実施。社会の中における美術館の役割に興味を持って活動している。

レポート

今回は、岡山県立美術館開館 30周年記念展「県美コネクション」と連携し関連イベントとして開催。まずは目黒区美術館の降旗さんより、教育ツールの制作を通して絵画の色と原料の関係に興味を深めた背景や、2016年に企画した展覧会で取り上げた江戸時代の国絵図や浮世絵の例が紹介されました。国絵図は岡山大学に所蔵されているものあったとのこと。美術作品というよりは、当時の地勢を記録したもので主に歴史分野で研究されてきたものですが、河川や道など様々な要素を表現するために豊かな色彩が使われており、それぞれにどのような原料が用いられているのかも合わせて研究したそうです。

降旗千賀子さんによるレクチャー

続いて、日本画家の森山さんからは描き手の立場から道具や材料、それらの使い方をどのようにとらえているか。大月コーディネーターからは、展示中の「岡山県立美術館コレクション活用 BOX・日本画編」の特徴についてなどのコメントを交えながら、絵画の制作過程の奥深さなどについてのトークが行われました。（森山さんは、BOXの制作にも参加）



尾上真由さんによる、絵の具のつくり方の紹介

昼食の後は、土から制作された絵の具を使ったワークショップです。まずは、森山さんの元教え子で、岡山大学大学院で研究活動などを行う尾上真由さんからのミニレクチャー。既成の画材ではなく、求める絵肌を探して絵の具を作るようになったきっかけに始まり、大学や自宅など、岡山の各地で採集した土がどのような工程を経て絵の具になるのか。写真や映像を交えて詳しく説明が行われました。

森山さんからも、この回のタイトル「画材から見る日本の絵画」に込めた思いや、用意した筆や紙などの画材の特徴や使い方についての説明が加えられ、各々にそれらを試しながら制作をする時間が設けられました。

森山知己さんによる、画材の紹介

制作後、乾燥を待つ間には「県美コネクション」の展示を見学する時間も設けられ、絵画と画材の関係について、多角的に知ることのできる 1日となりました。

ヒト・コト・場所

岡山県立美術館コレクション活用 BOX

日本画の材料。私たちは幼い頃から様々な画材に接してきました。色鉛筆にクレヨン、水彩絵の具、マジック、墨。でも、日本画の材料をじっくりと手に取ったことのある人は意外に少ないのではないでしょうか。生活の中でよく見る掛け軸や屏風ですが、その材料は洗練されていて実に魅力的です。この画材キットは、美術館学芸員、日本画家、プロダクトデザイナーそれぞれの専門性を生かした、優れた教育ツールです。

http://okayama-kenbi.info/

岡山大学池田家文庫の国絵図

岡山大学附属図書館には、江戸時代に岡山藩によって作成・収集された約 3,000点の絵図類が納められており、備前・備中を中心に 147点の国絵図が含まれています。国絵図は、幕府が主要大名に命じて作らせた旧国単位の地図で、境界、郡名、村落名、主要河川、主要道などが示されており、一辺が数メートルにおよぶ巨大なものもあります。当時の絵画とほぼ同じ色材が豊富に使われ、描画技術も高く、地図という機能を超えた美術的な性質を備えています。画像：備前国絵図（岡山大学附属図書館所蔵）

http://ousar.lib.okayama-u.ac.jp/ikedake/ezu/ja

吹屋のベンガラ

ベンガラ（弁柄）とは酸化鉄顔料の一種で、赤色をしています。インドのベンガル地方から輸入されていたことからベンガラと名付けられ、絵具、染織、輪島塗りなどの漆器や伊万里焼、九谷焼などの陶器の着色にも使用されています。岡山県高梁市の吹屋地区ではこのベンガラ製造が江戸時代後期から昭和の中頃まで大変盛んで、また吹屋地区のベンガラの品質は格段に優れていたことから「赤の中の赤」と言われ、日本全国、そして海外でも広く知られていたと言います。1974年に吹屋のベンガラの歴史は断たれてしまいましたが、現在も吹屋地区では赤胴色の菱屋根が一斉に並び、その美しい街並みからも当時の面影をうかがうことができます。提供：岡山県

ワークショップ

ランチ

岡山市表町のカフェ EXCAFEさんのランチボックス。デザートは、とろみのある液体を混ぜると白濁したゼリーで、この日のキーワードのひとつ「沈殿」を感じるもの。見た目も味も楽しめるものだった。

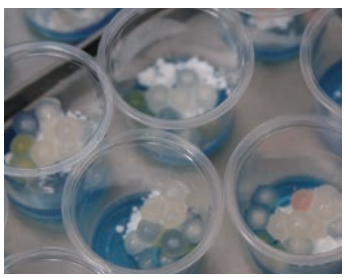
筆先で紙表面を感じて水を溜め、沈殿する時間を生み出す

・三椏（みつまた）を原料とする 3種類の紙（梳いたままのもの、表面を加工したもの、滲みどめを塗ったもの）、牛と猪の皮から作った 2種類の膠（にかわ）、岡山の各地の土から作られた絵の具を選ぶ。

・線や点々など単純な描画により、色の違いだけでなく、水や紙とのつなぎの役割をする膠の量や種類による違い、紙に絵の具を置くように塗ったり粒子を動かすように広げたりする感覚、滲み具合の違いを体感する。

・好みで岡山ゆかりの墨、染料（朱土、ベンガラ、藍）なども使ってみる。

・地塗りや仕上げの白色に使う胡粉を乳鉢で作ってみる。細かく、小さな粒子にするほど綺麗な発色が期待できる。



参加者コメント

・絵の具や土の色などを通して、土地のことを考える時間になりました。（40代 /女性 /セラピスト）
・土から絵の具をつくる過程の説明が面白かったです。（30代 /女性 /自営業）
・ランチの時間に講師の方と交流できたのがよかったです。（50代 /女性 /会社員）
・国絵図の表現の豊かさ、絵を「描く」という行為の奥深さなど多くの発見がありました。（30代 /男性 /自営業）

講師コメント

岡山にもよい国絵図があるのを知ることができてうれしく、それらが土地の色などが結びついてできているものだったら楽しいことだと思いました。（森山）

岡山大学の国絵図の素晴らしさを紹介できてよかったです。美術・博物館もこうして社会教育分野などと繋がっていくと意義のあることだと思います。（降旗）

日本の絵画を画材からみたことにより、日本という国の自然や風土、国の成り立ちに思いが巡り、岡山大学に所蔵されている国絵図のお話、水（液体）の力を使う「沈殿」に着目したランチ・デザート、そして、土から制作された絵具を使うことによって、その土地ならではの文化を感じるコトが起こった今回の企画。岡山ゆかりをキーワードに美術館活動をしている当館として、意義深さを感じています。（岡本）

5年間ほど試行錯誤してきた絵の具をこのような形で人に触れてもらったのは初めてで、感想も聞くことができいい機会になりました。身近なものでできることがある楽しさを感じてもらえていたらうれしいです。（尾上）

文化芸術交流実験室07

糸紡ぎから広がる世界

日時：2018年5月19日(土)11:00〜17:00
※映画『YARN 人生を彩る糸』上映15:00-16:15
開催地：岡山県立大学（総社市窪木111）
講師：青島由佳（Kakara Woolworks 主宰）
難波久美子（岡山県立大学デザイン学部造形デザイン学科 教授）

太古の時代から今に至るまで、糸と私たちの生活は切っても切れない深いつながりを持ちつづけています。しかし、家庭での手仕事が廃れはじめて以降、糸と私たちの関係性は希薄になりました。原材料から変容する過程を知るチャンスも激減しています。日々の生活の中に、糸から始まる物語を取り戻すために、糸紡ぎを自由な気持ちで楽しむ事を体験してみたいと思います。アート・ドキュメンタリー映画『YARN人生を彩る糸』の上映も行います。

青島由佳…武蔵野美術大学短期大学部で染織を学ぶ。羊の仕事を探し、ニュージーランド南島に住む。2007年に Kakara Woolworksを埼玉で創業。2013年より新・東京スピニングパーティー事務局を引き継ぎ毎年 9月に企画開催。2014年に倉敷へ移住。手紡ぎ手織りを主体とした活動、染織・糸へんの国内外の染織技術・文化や交流をより良くしたいと奮闘中

難波久美子…かすり染織技法を中心としたテキスタイルデザイン制作を軸に、染織文化研究や地域文化振興に携わる。岡山大学卒業の後、金沢美術工芸大学大学院研究科に学び、1982年渡米。ニューメキシコ州で、羊一頭山羊二頭と共生しながら作家活動。1994年帰国後、岡山県立大学でテキスタイルデザインを教える。研究テーマは「伝統の現代的表現」

レポート

この日の会場は、総社市にある岡山県立大学の講義室。デザイン学部教授でもある作家の難波さんと、倉敷を拠点に活動する青島さんによるレクチャー、糸紡ぎ体験ワークショップ、大学の設備見学、映画上映と盛りだくさんの内容でした。

レクチャーはお 2人の活動や、糸やその素材となる羊毛、紡ぎに関する基礎的な知識を織り交ぜながら進行。生活の近くにあるテキスタイルという表現、羊毛や糸車への愛情や思いが溢れる自己紹介にはじまり、そもそも糸の原料にはどのようなものがあるのか、天然繊維である羊毛にはどのような特徴があるのか、布になるまでの過程やストーリー、大学ではどのようなことが教えられているのかなど。写真はもちろん、様々な道具の実物を見たり、刈り取ったままの羊毛を触ってみたりしながら理解を深めました。

羊毛は虫には弱いですが、防水性、保湿 /保温性、難燃性、防音性などの点で化学繊維よりも優れた点があるそうです。羊毛繊維を紡ぐ前には、毛を刈り、ゴミを取り、洗い、ほぐすなどの様々な準備が必要で、紡ぐ工程にも手がかかります。だからこそ、手しごとの楽しさ、豊かさとゆっくり向き合うことができると言います。生活との関わり方の例としては、アメリカ南西部にある工房 Tierra Wool（ティエラ ウール）の様子、手紡ぎのプログラムが心を休めるホスピスに導入されている事例なども紹介されました。

ランチの後は、いよいよ手紡ぎの実験。色とりどりの羊毛ファイバー、様々な形のスピンドルから好きなものを選び、簡単なレクチャーと実演映像を参考に、それぞれのスタイルで紡いでいきます。声をかけあったり、難しいところは県立大学の学生さんの力もかりながら、楽しく体験する時間となりました。

途中、息抜きがてらデザイン学部ギャラリーでの作品展示や、織・染・シルクスクリーンなどのテキスタイル工房設備見学ツアーも実施。ものづくりがしっかり学べる環境に、参加者は興味深々でした。

そして最後には映画『YARN 人生を彩る糸』の上映。羊毛や糸紡ぎの道具に囲まれる中、創造的なアーティストの表現にふれる時間はまたとない時間となりました。

素材や道具を紹介する青島由佳さん

ワークショップ中の受講生と難波久美子さん

参加者が紡いだ、色とりどりの糸

ヒト・コト・場所

岡山県立大学デザイン学部

1993年開学。保健福祉学部、情報工学部、デザイン学部の 3学部から成り立っています。デザイン学部はデザイン工学科と造形デザイン学科で構成され、社会に求められる様々なデザイン分野を視野に入れたカリキュラムを提供しています。造形デザイン学科テキスタイル系授業では、3年次に成羽町美術館で販売するグッズを制作するなど、実践も重視。学内にはデザインを具現化するための様々な設備やギャラリーなどがあり、充実した制作環境を有しています。

https://www.oka-pu.ac.jp/

Kakara Woolworks（カカラ ウールワークス）

2007年創業。ルエ・マジャクラフト社日本総代理店。糸紡ぎの楽しさを、もっとたくさんの人に広めたい!知ってほしい!という想いからスタートした糸車屋。倉敷の事務所には、世界中から集まった羊毛や、面白いファイバー、紡ぎ車、手織機、いろいろな道具素材などで溢れかえっています。糸を紡いで夢を紡ぐ・人と繋がることを実感して、一人でも多くの方に、自由な手紡ぎの醍醐味を味わってほしいと、自信を持っておすすめできる道具たち、手仕事の時間を少しでも快適に、楽しくワクワクするような時間を皆様と共有したいと活動しています。

http://kakara-woolworks.jp/

YARN 人生を彩る糸

手しごとへの回帰やクラフト・フェアの活況などのクラフト・ブームの中、YARN（糸）を紡ぎ、編み、表現する 4組のアーティストが、彩り豊かな糸に人生を見出した姿を描いたクラフト・アート・ドキュメンタリー映画。

2016年 / アイスランド・ポーランド / 英語・アイスランド語 / ドキュメンタリー / 76分 / 原題：YARN / 日本版字幕：大西公子 / 後援：アイスランド大使館 / 提供・配給：ミッドシップ + kinologue

©Compass Films Production 2016　http://yarn-movie.com/

ワークショップ

ランチ

総社市真壁のカフェ匙さんのランチボックス。普段から、からだに優しい「匙ごはん」をランチで提供している。

スピンドルで糸紡ぎ

① 好きな色・質感の羊毛ファイバーを選ぶ。
② スピンドルに導き糸をセットする。
③ ファイバーを広げ、紡ぎたい部分をちぎりとる。
④ 導き糸にファイバーをひっかけて、スピンドルを回しながらよりをかけて紡ぎのばしていく。
⑤ 糸になった部分はスピンドルの下部から巻きつけていく（以上を繰り返す）。
⑥ 紡いだ糸を毛糸玉に巻きとりなおし、綿の糸と撚り合せて表情のある双糸にする。
⑦ 紡ぎ方は均一でなくていい。糸の質感などを感じながら楽しく紡ぐ。

参加者コメント

・たくさんの素材を見ることができとても楽しかった。このような機に大学がより地域に開かれる場所になったら良いなと思う。（40代 /女性 /自営業）
・とても有意義な一日となり心地良かったです。心から遊んで学べたという感じです。（50代 /女性 /教員）
・トークもワークショップも充実していて楽しかったです。今流行しているナバホウィーヴィングについても教えていただき嬉しかったです。（40代 /女性）
・普段は綿を紡いでいるのですが、羊毛のすばらしさ、楽しさも再認識できました。映画もとても感動的でした。（50代 /女性 /NPO法人）

講師コメント

細く長く綺麗に紡ぐことだけが正解ではないので、初めて糸を紡いだ方には今日の体験をぜひ覚えておいて欲しいし、経験者の方も初心を思い出してもらえていたら、よい機会になったと思う。糸を使って何かをつくるということに興味を持ち、何かしら関わってもらえらたらうれしい。（青島）

スピンドルは個人で時間のある時にやりやすい手法だけれども、今回のように集まってみんなで紡ぐという体験もあまりないので豊かな時間だった。楽しみ方は様々な形であると思うので、生活に取り入れてもらえたらと思います。（難波）

テキスト：橋本誠（ノマドプロダクション）

文化芸術交流実験室08

文化芸術の仕事で生きる

日時：2018年6月2日(土)11:00〜16:00
開催地：Jテラスカフェ（岡山市北区津島中1-1-1）
講師：矢萩多聞（画家、装丁家）
　　川埜龍三（芸術家/無職）
　　柏原拓史（NPO法人だっぴ代表理事）

文化芸術の世界で暮らす人のたどってきた道筋は、一般的なルートだけではないのが面白いところです。インドと日本を行き来している矢萩多聞さんは著書「偶然の装丁家」の中で、子どもの頃から今に至るまでの美術や人との関わりを綴っています。美術家の川埜龍三さんは学校の中で独自の立ち位置をとっていました。若者の活動を支える柏原拓史さんとともに、出会いが、人や仕事をどう作っていくのかを考えます。ワークショップでは、ユニークな本作りも楽しみます。

矢萩多聞…1980年横浜生まれ。中学で学校をやめ、南インドと日本を半年ごとに往復し暮らし、ペン画の個展を開く。2002年から本づくりの仕事に関わり、これまでに 450冊を超える本をてがける。京都でちいさな暮らしを実践中

川埜龍三…岡山県笠岡市在住。独学で美術制作を学び、ジャンルや素材に囚われない作品スタイルと造形力を持つ。主な作品は個人企画《犬島の島犬》（2012年）、倉敷市玉島を題材にした空想ドキュメンタリー作品《玉島マチヲ》（制作中） など。

柏原拓史…岡山県岡山市出身。名古屋大学大学院修了後、環境保全に携わりながら、環境教育の普及、人材育成の業務を通した社会教育活動に従事。2007年から有志の勉強会やイベントの開催を始め、2013年 NPO法人だっぴを設立

レポート

今回の会場は岡山大学内にある Jテラスカフェ。建築家ユニット SANAAの手による開放的な空間の中で参加者は濃密な時間を過ごしました。

まずは今回のゲストである、矢萩さんと川埜さんによるトークセッション。このイベントの打ち合わせで初めて出会ったというふたりはすでに意気投合。その理由はお互い、就職しないで生きているからなのでは、という話に。矢萩さんは中学校の頃に、学校の授業と自分の興味が離れていることを感じ、学校をやめ、家で創作活動。川埜さんもまた、大学まで行ったもののうまく学校生活に馴染めず、それを埋めるように創作活動に熱中していたと言います。このひとりきりでの時間から生まれた作品たちが世間の人に見られたり、褒められたりすることが何よりも嬉しいとふたりは語り、今でも文化芸術の仕事を続けている理由のひとつになっているそうです。

矢萩多聞さん（写真右）と川埜龍三さん（写真左）のトーク

トークの後半では、ふたりの作風が一貫しておらず、よく変わるという共通点の話題。その理由は、ふたりとも普段の生活の中でも、その場ごとの工夫や調節を大切にしているからだと言います。日常の世界では時に足並みを揃えることが求められる。けれど、デコボコした世界を平たくするのではなく、そのデコボコに対応していくことを楽しむことが大事、とこの時間を締めくくりました。人とは違う生き方をするふたりの生き方や考え方に、参加者は深く惹きつけられていました。

ワークショップの説明をする柏原拓史さん

ランチの前に、3人目のゲストである柏原さんが登場。代表を務める NPO法人だっぴは、普段話さない人たちと普段話さないことをテーマに交流する場を作っています。この日、参加したみなさんにも、それぞれ自己紹介をしていただき、和やかな雰囲気で昼食の時間となりました。昼食後はだっぴの行う活動を会場で再現するワークショップ。普段話さない人と交流する、だっぴの大事にしている「新しい関係性」を創出する場になりました。

そしてさらに、矢萩さんが担当する本を作るワークショップ。「人はなぜ本を作るのか?」という矢萩さんからの問いに応えるよう、参加者のみなさんが思い思いの紙や綴じ方をし、最後の発表会では個性あふれる本たちがテーブルの上に並びました。矢萩さんも「こんなにうまくいくと思わなかった」というほどの大成功で、盛りだくさんだったこの日の実験室は幕を閉じました。

だっぴのワークショップを体験する受講生

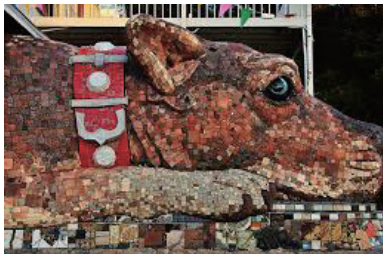
ヒト・コト・場所

NPO法人だっぴ

岡山県内を中心に、若者ひとりひとりが自分らしい生き方を選び、人とのつながりを支えるプロジェクトを展開しています。特に地域で魅力的に生きる大人 50人と若者 50人の出会いの場として開催するメイン事業「だっぴ 50 × 50」は多くの人々の心を揺さぶり、若者たちの人生に影響を与えています。そのほかにも「中学生だっぴ」「高校生だっぴ」など、進路相談や地域の先輩に出会う場として、学校とも連携しても活動しています。

Junko Fukutake Terrace

公益財団法人福武教育文化振興財団の福武順子氏の寄付により、2014年に完成。妹島和世氏と西島立衛氏による世界的に有名な建築家ユニット SANAA（サナア）の設計による施設。施設内の Jテラスカフェでは季節の素材をたっぷりと使用した食事をすることができます。岡山大学のキャンパス内にありますが、大学の垣根を超えて教職員や学生が地域の人々と交流する架け橋として設計された、学外からの様々な人に開かれた空間となっています。



犬島の島犬 (犬島ハウスプロジェクト)

おかやま山陽高校所有の海の家（通称ホワイトハウス)を犬小屋に見立てて、芸術家の川埜龍三氏が製作した巨大な犬の彫像作品。その犬の素体は岡山県笠岡市のアトリエで作られ、巨大な犬を乗せた船で瀬戸内の島々を経由する「瀬戸内海横断散歩」を行い、犬島まで到着しました。全国の有志によって作られた犬用のタイルで表面を覆われ、犬島の番犬として圧倒的な存在感を放っています。2013年の完成から現在でも恒久展示として観覧が可能です。

ワークショップ

ランチ

「あなたのお皿はあなたの宇宙」。盛られたおかずを好きな順番で、自由に混ぜて食べていい。インドで招かれた家のお母さんの言葉に感銘を受けた矢萩さん。その食文化を Jテラスカフェが再現。野菜やお肉などの様々な食材を好きにチョイスし、白いご飯の上に盛り付け、混ぜていただくビビンバ風のご飯に参加者も大満足。

知らない人と普段話さないことを話す

・あらかじめ班に分けられた参加者全員に、紙とペンが配られる。
・参加者に質問が与えられ、回答を考えて紙に書く。
（この日の質問は「今だから言える若気の至りは？」「生きる、それは○○」など。）
・一斉に答えを出し、気になった回答に質問し合う。

自分の本を作る

・広告、チラシ、メモをした紙、レシート、カフェのナプキン、包装紙などの日常で出会う様々な紙を集める。
・集めた紙を見ながら、どういう本にしたいかを考える。必ずしも文字が必要なわけではなく、紙だけで物語を語っても良い。
・それらを好きな順番で重ねていく。切ったり貼り付けたり好きに加工しても良い。
・クリップや糸と針、糊などでそれらを止める。大きい紙だったら蛇腹に折りたたんだりしても良い。

参加者コメント

・対談がとても面白かった。（40代 /男性 /会社員）
・1日が気づいたらあっという間に過ぎてしまう、充実の内容だった。（60代 /男性 /家具屋勤務）
・内容がとても面白く、始終楽しく過ごすことができました。（40代 /男性 /自営業）
・トークの掛け合いがとても良かったです。（30代 /女性）
・実際に手を動かすことができるワークショップがとても良かったです。（20代 /女性 /会社員）

講師コメント

みなさん、何も言わなくてもどんどん自分で本を作っていらしてびっくりしました。家にあるどんな紙も、束ねて綴じると本になる。それがわかってもらえたワークショップになったと思います。（矢萩）

大学の敷地内ということも踏まえて、一般に加えて学生の参加もあれば広がりがあったのではないかと思います。僕は、もう少し不謹慎に話が出来れば良かったかなと思いました。（川埜）

ただ、芸術に触れるということだけではなく、参加された方同士の新たなつながりだったり、お互いの発見にもなる時間だったと思います。皆さん本当に楽しそうで、自分は社会教育分野の人間ですが、分野を超えて交流できるとても良い時間でした。（柏原）

テキスト：・高橋大斗

文化芸術交流実験室09

音楽と絵と映像と

日時：2019年1月13日（日）11:00〜16:00
※豪雨災害のため2018年7月16日より振替実施
開催地：倉敷市立美術館3階 講堂（倉敷市中央2-6-1）
講師：トウヤマタケオ（音楽家）、nakaban（画家）
当真伊都子（ピアニスト、ボーカリスト、コンポーザー）

音楽の世界と絵の世界。それらを軽々と越境し行きつ戻りつする表現者たちがいます。一体どちらが先に生まれるのでしょうか？　様々な表現者とのコラボをおこなうトウヤマさん。絵を描きつつ、音楽家のトウヤマさんと一緒に幻灯機を使ったランテルナムジカを続ける nakaban。トウヤマさんとのセッションもおこなうシンガー、ピアニストの当真さん。ワークショップでは、参加者の方々と様々な実験を行います。音と絵と映像が混沌と一体化する世界を共に味わってみましょう。

トウヤマタケオ…1965年兵庫県生まれ。作曲、ピアノ、声、諧謔、郷愁、D.I.Y. ピアノ弾き語りの他、チェリスト徳澤青弦とのデュオ“Throwing a Spoon”、8ビート偏愛バンド”PATO LOL MAN”、旅する幻燈楽団”ランテルナムジカ”など活動は多岐に渡る。

nakaban…画家。ランテルナムジカの映像係。旅と記憶を主題に描くタブローの他、挿絵や絵本、文章、漫画、映像など幅広く発表。新潮社「とんぼの本」のロゴマークデザインほか仕事多数。「窓から見える世界の風」（創元社 , 2018）の絵を手がける。

当真伊都子…1977年岡山県生まれ。倉敷市在住。4歳よりクラシックピアノを学び、クラシック以外の音楽にも深く興味を持つ。1st アルバム「dreamtime」（2010）、2nd アルバム「when the world will mix well」（2017）をリリース

レポート

会場は、倉敷美観地区にある倉敷市立美術館。周辺では朝から気持ちよさそうに散策する方の姿が見られます。今回も、アートや音楽などに興味のある方々が県内外からたくさん集まりました。会場の講堂に入ると、客席には不思議な道具や楽器がたくさん並んでいて、参加者のワクワクも高まります。

まず、3人による映像と歌と絵のパフォーマンスで幕開けです。トウヤマさんのピアノ、当真さんの歌、nakabanさんの絵が紡ぎ出す幻想的な世界に、会場の空気は一変。参加者は一気に引き込まれました。続いて、緩やかに 3人のトークへ移ります。当真さんがインタビュアーとなり、ふたりの音楽や絵との出会いや、ランテルナムジカの活動について話を伺いました。

まず、音楽との出会いについて、「聴く listen」と「弾く play」のどちらが先だったか、トウヤマさんと当真さんとで互いに記憶を話し合います。一方、nakabanさんにとって描くという行為は、子どもの頃から身近にあるもの。ただ、大人になって仕事として描くことを始めると、時々窮屈に。描くことにある本来もっと自由な可能性を、ライブでお客さんと一緒に楽しみたくて、ランテルナムジカを始めたのだそうです。トウヤマさんによると、ランテルナムジカのパフォーマンスには特に細かなルールはなくて、始まりと終わりがあること、決めることと決めないことを決める、のが唯一のルール。大体、トウヤマさんが音でやることを決め、nakabanさんが絵で何をするかを考える流れだそうですが、実際は打ち合わせ通りにならないことも多く、その場で即興でやってみるなど、毎回が実験の連続なのだとか。音楽と音と映像について話が尽きず、あっという間に時間が。

ランチの後、いよいよワークショップです。3グループに分かれ、「音を奏でる」と「絵を描く」と「観る」を交代しながら、パフォーマンスに挑戦します。音を担当する人は、トウヤマさん、当真さんからアドバイスをもらいながら、それぞれの「楽器」の音を確かめ、どれをどう使うか考えます。絵を担当する人は、nakabanさん持参の「ライトボックス」を使って廃材を組み合わせたり画材で絵を描いたりしてプロジェクターに投影していきます。会場に用意された、様々な廃材・端材、音が出る素材、照明、画材をどれでも好きなように使って OK。事前に音と絵とで何をするか打ち合わせをする人、ぶっつけ本番で互いに様子を探りながら作り上げていく人とやり方は様々。楽器や画材の選び方、使い方にも個性が光ります。最初は探り探りだった参加者も、他の人の様子にも刺激されてどんどん夢中になっていきます。初めてとは思えないほど、美しい音楽や絵画の世界が繰り広げられました。最後に、講師 3人も一緒になってフリーセッション。会場が楽しい一体感に包まれました。

倉敷市立美術館の講堂が、まるで東欧のカフェのよう

nakabanさん手製のライトボックス

トウヤマさん、nakabanさん、当真さんのトーク

ヒト・コト・場所

倉敷市立美術館

建築家・丹下健三氏の設計により 1960年に建てられた。元々は市庁舎本館として使用されていたが、新市庁舎建設計画が持ち上がったこと、また、倉敷市玉島出身の日本画家・池田遙邨氏から倉敷市への作品寄贈が契機となり、美術館設立の構想が出され、1983年、倉敷市立中央図書館、倉敷市立自然史博物館とともに開館した。改築設計は倉敷市出身の建築家・浦辺鎮太郎が担当。11,000点の収蔵作品のうち、日本画家・池田遙邨氏の作品は 8,000点を占めている。企画展、コレクション展のほか、教育・普及事業として高校生以上を対象に美術実技指導も行われている。

住吉町の家 分福

1926（大正 15・昭和元）～ 1928（昭和 3）年頃にかけ、倉敷市住吉町に意匠を凝らして建てられた町屋建築を改修し、2018年 3月にオープンしたサテライトオフィス＆コワーキングスペース。木造2階延べ約 240平方メートルの建物に、テレワーク（情報通信技術を活用した、場所や時間にとらわれない柔軟な働き方）に対応した環境を備えたワークスペースやプレゼンテーションルームなどを備えている。利用登録により半日 500円から利用可能。名前の由来は、建物内部から昔話「分福茶釜」をモチーフにした茶釜が見つかったことから。倉敷市の一般社団法人・高梁川プレゼンターレ、倉敷市、倉敷芸術科学大学などが連携して整備し、運営も同法人が行なっている。

ランテルナムジカ

音楽家トウヤマタケオと画家 nakabanによる音と映像のライブ・プロジェクト。「ランテルナムジカ（lanternamuzica）」は「幻燈（lanterna magica）」と「音楽（musica）」を組み合わせた造語。2010年の結成以来、美術館、公会堂、電車、カフェ、海辺のレストラン、雪国の温泉、本屋、ロックフェスティバルなど、全国各地の様々な場所でライブツアーを重ねている。トウヤマタケオがピアノと歌で、nakabanがライトボックスから投影した線や点などの絵で、共に曲を紡ぐ。ライトボックスは、ワインの木箱やライトなどを組み合わせた nakaban手製のオリジナル画台で、ドローイングやオブジェの影などをプロジェクターで壁などに投影することができる。

ワークショップ

ランチ

倉敷市立美術館のすぐ南側の住宅地にある「住吉町の家 分福」に移動し、おにぎり弁当を頂きました。町屋の落ち着いた空間の中で、偶然隣あった人同士でも、自己紹介をしたり情報交換をしたりして打ち解けた雰囲気に。

ランテルナムジカを体験

①「絵を描く人」「音を奏でる人」「観る人」の3グループに分かれる。
②グループのメンバーに1～10までの番号を振り、同じ番号の人同士で2分間自由に表現していく。会場にあるものは何を使っても OK。
③「絵」「音」「観る」を交代していく。
④最後はフリーセッション！　トウヤマさんのピアノに合わせて絵や音に自由に参加していく。

参加者コメント

・日常が豊かになるようなことを気軽に経験できることは素晴らしいことと思います。（40代 / 女性 / アーティスト）
・一般の参加者も素敵なパフォーマンスをしていて、皆様の豊かな感性に驚きました。遊びの中でアートが広がっていたと思います。（50代 / 女性 / 教員）
・自分がきれい！美しい！と感じること、私では思いつかなかった、すごい！と他の方のパフォーマンスを見て発見することが多くありました。（50代 / 女性 / 保育士）
・色々なきっかけを一つもらえた。とても充実した時間でした。稀有なものを目撃させてもらったように思います。（30代 / 女性 / 会社員）

講師コメント

会場が、圧迫感もなく散漫にもならず、いい広さで、皆さんがどんどんのめり込んでいく姿が印象的だった。「おお～っ」と唸る瞬間が結構あり、僕自身も勉強させてもらえた。（トウヤマ）

参加者の皆がどんどんパフォーマンスし始めるのを見て、改めて、表現するのはいいなと感じた。これからも、表現することが身近にあってほしい。ぜひ、身近にあるものをコツンと鳴らしたり、ビリっと破いたりして楽しむことをこれからもしてもらえれば。（当真）

ライトボックスで絵を描く時はひとりぼっちだが、嫌なひとりぼっちではない。すごく広い広場を与えてもらったような特別な感覚で、長いとも、あっという間とも言える特殊な時間をライブで味わえる。参加者の皆さんにも、そういった感覚を味わってもらえたのでは、と思います。ライトボックスはぜひ自由に作って色々試してみてほしい。（nakaban）

テキスト：木下志穂

文化芸術交流実験室10

建築探偵団 其の壱『会館』

日時：2018年8月25日(土)11:00〜16:00
開催地：岡山市民会館（岡山市北区丸の内2-1-1）
講師：石田尚昭（建築家、岡山市スポーツ・文化振興財団 常務理事）
弥田俊男（建築家、岡山理科大学工学部建築学科 准教授）

県内に点在する興味深い建築物を詳細に見ていき、その魅力や、コミュニティーの中でどのような文化的役割をになってきたか、さらには、その新たな活用の可能性などを検証するシリーズ。第一弾として取り上げるのは、芸術文化の拠点として長らく愛されてきている岡山市民会館。そして、同じ建築家の設計である山陽放送会館です。ワークショップでは、改めてその魅力を多角度から探り、味わい尽くします。あることが当たり前であった建築の知られざるチャームポイントを皆で発掘してみましょう。

石田尚昭…東京理科大学大学院工学研究科建築学専攻修了。1980年岡山市役所入庁（建築職）後、庭園都市推進課長、都市整備局審議監（都市・交通・公園担当)として、市民協働による西川緑道公園の活用事業（西川パフォーマー)や旭川かわまちづくり事業(さくら道桜の保全他)を手がける。2016年退職。岡山市都市整備局まちづくりアドバイザー、国立大学法人岡山大学地域総合研究センター研究員・アドバイザー

弥田俊男…1974年愛知県生まれ。1996年京都大学卒業、1998年京都大学大学院修了。1998年より隈研吾建築都市設計事務所に所属、根津美術館、サントリー美術館等を手掛ける。2011年、弥田俊男設計建築事務所を設立、岡山理科大学建築学科准教授に着任。岡山と東京の2地域を拠点に活動。設計を手掛けた「春日大社国宝殿」が 2016年 10月にリニューアル開館

レポート

今回は建築をテーマにしたシリーズ第一弾として、岡山市民会館と、その向かいにある山陽放送会館を取り上げました。いずれも建築家・佐藤武夫の手により同時期（1960年代前半）に建てられたもので、近々新たな場所への機能移転が予定されており、その後の活用方法に注目が集まりつつある建物です。

まずは弥田さんによるレクチャー。作家・ジャーナリストのジェイン・ジェイコブズが、都市的多様性を生成する条件として示した「地区は、年代や状態の異なるさまざまな建物が混ざり合っていなければならない」という言葉。公共建築の活用にあたって注目を集めている「シビックプライド」「アダプティブ・リユース（適応型再利用）」といったキーワード。市民の声がきっかけとなり、2014年に大規模改修した米子市公会堂（村野藤吾設計）、熊本城近くにあり、2007年に大規模改修した熊本市民会館（佐藤武夫設計）などの建物。後半のワークショップのヒントになるような考えや事例などが紹介されました。

続いて、石田さんより建物の紹介。設計を担当した佐藤武夫は、広場・塔・音響を取り入れた建築が得意だったと言われていること。岡山市民会館はホール機能を有し、塔も計画されていて、山陽放送会館のとの間の広場についても意識した設計になっています。他にも、内向きに倒れているように見える錯視効果のある大ホールの外壁、岡山城にちなんだ石垣の使用、ホワイエのレリーフや手斫（はつり）による壁面の表情、モザイクガラスを使用した内装などの特徴が解説されました。

昼食の間には、RSK岡山映像ライブラリーセンターの協力により、山陽放送会館建築時の映像を上映。ほぼ同時期の建設ということで、岡山市民会館の建設についてもイメージがわく内容でした。その後、石田さんによる岡山市民会館内のツアー。レクチャーで見聞きしたポイントなどをめぐりながら、実際の空間や使われ方、様々な装飾の表情などを確認することができました。

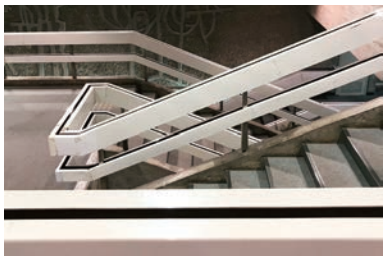
そして最後に、グループに分かれて建物の魅力的な将来の姿を考えてみるワークショップを行いました。弥田さんからは、建物だけではなく、隣接する石山公園や、岡山城へつながる区域についても考えて欲しいというリクエスト。ホールの 1階席を外して多目的利用ができるようにする、モザイクガラスのあるホワイエでバーを営業する、起業家のシェアオフィスとして活用する、周辺を回遊できる歩道を整備するなど、グループごとに様々なアイデアが発表されました。

石田尚昭さん（写真左）による岡山市民会館の建築ツアー

モザイクガラスを使用した内装

弥田俊男さん（写真左）によるワークショップ

ヒト・コト・場所



岡山市民会館

オリジナルにつくられた独創的な手すり。

1964年に竣工して以来、岡山の文化活動の中心を担ってきた多目的ホールは建築家の佐藤武夫氏によって設計されました。お向かいの山陽放送会館も同氏の設計です。

市民会館の紹介には、カラフルなガラス窓を含めたロビー部分の写真がよく使われますが、他にも見所はたくさんあります。

山陽放送会館

1962年竣工の建物は佐藤武夫氏の設計。

外壁に使われているコンクリートブロックのグリッドが印象的です。向かいの岡山市民会館も同じブロックで構成されています。最近の工事では、このようなパーツは工場生産のコンクリートパネルやブロックを使うのでしょうが、ここでは現場で一個ずつ手づくりされています。

岡山映像ライブラリーセンターには、そんな丁寧に型取り作業をする工事の貴重な記録映像が残っています。

石山公園

岡山市民会館や美術館などが建ち並ぶ岡山カルチャーゾーンのエントランスにあたり、旭川と岡山城、後楽園を眺めることのできるスポットとして知られている土手沿いに位置する公園。

オープンカフェやライブなどのイベントが開かれ、多くの市民の憩いの場になっているが、岡山市が回遊性のさらなる向上と、にぎわいの拠点の創出を目指してリニューアルを計画中。2016〜2017年にかけて行ったワークショップなどにより寄せられた意見を元に、設計・リニューアル工事が進められている。

ワークショップ

ランチ

岡山市内の人気店 Hi-Five（ハイファイブ）のお弁当を食べながら、RSK岡山映像ライブラリーセンターの協力により、山陽放送会館建築時の映像を鑑賞

岡山市民会館 +山陽放送会館の、建物の魅力的な将来の姿を考えてみる

・あらかじめ班に分けられたグループに、建物や周辺の図とペンが配られる。

・2つの「会館」の魅力（チャームポイント）を引き出し、際立たせ、生かす、「着眼点」へのアイデアを考える。

・石山公園・旭川土手を含めた、エリア全体の将来像へのビジョンと、その中での、2つの「会館」の”将来の夢”へのアイデア（部分への、建築全体への、ハードについてのアイデア・用途や企画など、ソフトについてのアイデア）を考える。

・「率直な思いつき」「大胆な飛躍」「素直な考え」を意識する。無理にひねり出さなくてもよい。

・アイデアを図に落とし込み、グループごとに発表する。

参加者コメント

・普段見れない場所を説明つきで見れたのがよかった。（30代 /女性 /自営業）
・建物の魅力を識る古都ができた。（50代 /男性 /地方公務員）
・色々な視点でものを見ること、考えることができました。（30代 /男性 /会社員）
・グループで意見を話し合うのが面白かった。（50代 /女性 /事務職）

講師コメント

今日取り上げた施設の活用については、近い将来また話題になることがあると思うので、その時にまたアイデアをだしていただいて、それがよい出発点になればと思います。（弥田）

まずは興味を持っていただくことが次の活用につながると思っています。オリエント美術館など、岡山市内にも様々な施設があるので、そのような建物にも興味を持っていただければうれしいです。（石田）

テキスト：橋本誠（ノマドプロダクション）

文化芸術交流実験室11

文化を伝える グラフィックデザイン

日時：2018年9月29日(土)11:00〜16:00
開催地：IDEA R LAB、TAMAYA TAMASHIMA（倉敷市玉島中央町3）
講師：黒田武志（アートディレクター、造形作家）
　　川路あずさ（アートディレクター、デザイナー）

優れた活動で注目される瀬戸内市民図書館 もみわ広場は、きちんとデザインされた広報戦略も見事です。グラフィックや写真を大切に考えた編集・デザインが、館のハードにもソフトにも浸透し、活かされています。文化施設においてデザインが担う役割を改めて考えてみたいと思います。もみわ広場のデザインディレクションを担当された黒田さんや文化芸術交流実験室のグラフィックを担当されている川路さんに、仕事の舞台裏をうかがいます。ワークショップでは、グラフィックデザインや編集のコツなどを、実際に手と目を使って学びます。

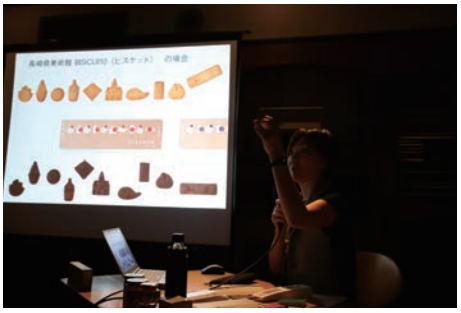
黒田武志…アートディレクター、造形作家。1962年岡山県出身。ロゴタイプからエディトリアル、数々の劇団のフライヤーやパンフレットのデザインの他、科学・芸術・哲学を横断するようなテーマでインスタレーション、オブジェ、映像作品を発表。独自の表現活動を続けている。また劇団「維新派」の舞台美術を担当するなど活動は多岐に渡る。2015年にはNHKの海外向け番組 DESIGN TALKSにて活動が紹介された。sandscape主宰

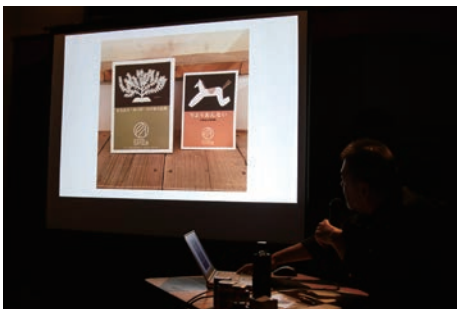
川路あずさ…アートディレクター、デザイナー。1983年福岡県生まれ。長崎県出身。福岡県在住。東京藝術大学美術学部卒業。出版社、デザイン会社などに勤務し、現在は福岡・長崎を拠点に活動中。文化、芸術、伝統に関わる、各地域のプロジェクトへのデザインサポートを行っています。アーティスト、職人、美術館、博物館との共同研究・発表などコラボレーションも多数

レポート

会場は、新倉敷駅からバスで 10分の倉敷中央町にある IDEA R LABと、商店街に古くからあった洋装店を改装し、昨年オープンしたアートセンター TAMAYA TAMASHIMA。雨で肌寒い日にもかかわらず、県内外からデザインやアートに興味があるという方々が集まりました。

まずは川路さんから「旅とデザイン」というテーマで話をお聞きしました。観光地でもある長崎県出身で、福岡県で暮らす川路さんは旅が好き。「好きな理由はなんだろう?」という切り口から、旅先や仕事で訪れた土地で気になったものがあればその理由を考えているそうです。それらが、企画や、グラフィックデザイン、誰とどんな風に制作するとイメージに近づけるかに至るまで、自身がつくるものにも影響してきたと言います。長崎県美術館の 10周年を記念して手がけた長崎県美術館 BISCUI10（ビスケット）では、「長崎ことはじめ」というキーワードから長崎に初めて伝来したビスケットに着目。地元のお菓子屋さんと一緒に試行錯誤を重ねてオリジナルの型で塩ビスケットが完成、ストーリーと共に広報展開し、今までに全国の様々なメディアにも取り上げられ定番の人気商品となっているそうです。


川路さんのデザインに、会場からは「かわいい!」の声


瀬戸内市民図書館 もみわ広場の仕事を紹介する黒田さん

続いて黒田さんにバトンタッチ。造形作家としても活動される黒田さんは、グラフィックデザインだけでなく、維新派を始めとする様々な劇団の舞台芸術に関わる仕事も手がけています。予算の制約があるからこそ生まれた斬新なデザインや様々な表現手法を紹介。特に、素材や折り方では、「こんなこともできるの?」と参加者から驚きの声が上がりました。また、瀬戸内市民図書館 もみわ広場では、みんなが行きたくなる図書館の実現にむけて、デザインにとどまらない展開となった仕事への向き合いかたを紹介しました。家に帰って親子で広げて会話できるようなパンフレット、毎日使いたくなる図書カードやトートバッグといったグッズの提案をはじめ、ロゴマークの検討過程では市民向けにも公開プレゼンテーションをしたり、子ども向けにワークショップを行うなど、様々な工夫をされたとのことでした。

午後からは、川路さんの提案で、会場周辺のマップを作るワークショップ。「半径 100mのコミュニティ」と題して、外から来た旅人の目線と街の住人の目線とが組み合わさったようなオリジナルマップをグループに分かれてつくりました。ロケハン中に建物の扉を開いた時の驚きを折り紙で表現したもの、昔海だったエリアを現代の地図に重ね、廃材で海やまちなみを表現したものなど、どのグループも斬新で独創的なマップが完成し、発表会ではそれぞれのアイデアや表現方法に感嘆の声が上がりました。

マップ制作のためのロケハン

ヒト・コト・場所

IDEA R LAB

日本における初のクリエイティブリユースの情報プラットホーム・実験室・レジデンスとして、2013年にオープン。世界各国のクリエイティブリユース・プロジェクトを訪ね歩いて集めた資料のアーカイブや、実験室で行われる廃材活用のモノづくりのノウハウをオープンにして、日本各地でのクリエイティブリユース活動への情報提供や支援、ネットワークづくりを進めている。おかやま文化芸術アソシエイツのプログラムコーディネーターも務める大月ヒロ子が運営している。

倉敷市玉島地区

万葉の頃より「玉のように美しい島々」とうたわれた玉島は、瀬戸内海に面し高梁川の河口に位置し、江戸時代から備中松山藩の外港として栄えた港町。問屋や蔵屋敷などの伝統的建造物群がかつての繁栄を物語り、岡山県の町並み保存地区に指定されている。また、羽黒神社を中心に伸びる通町商店街、清心町商店街、銀座商店街の3つの商店街は今も昭和のレトロな雰囲気を残しており、映画『ALWAYS 三丁目の夕日』のロケが行われるなど、近年注目が集まっている。IDEA R LAB、TAMAYA TAMASHIMA、遊美工房など複数のアートスペースがそれぞれに活動している。

美観堂謹製　黄ニラしょうゆ

倉敷のゲストハウス &カフェ「有鄰庵」のとなりに、2017年にオープンした岡山・倉敷のセレクトショップ「美観堂」のオリジナル商品。創業 150年の老舗・とら醤油株式会社で丹念に作られた醤油をベースに、岡山県の特産品である黄ニラをふんだんに使用して作られている。リニューアルしたパッケージデザインは、株式会社有隣の代表・犬養拓さんのディレクションのもと、川路あずささんが担当している。

ワークショップ

ランチ

今井酒店さん手作りの、玉島ゆかりの色とりどりのお惣菜や季節の栗ご飯をバイキング形式で。マップ制作チームに分かれ、自己紹介と作戦タイム

半径 100mのコミュニティ

- グループわけ（1〜5の番号を言っていく）、グループごとにランチ
- テーマを決める…「猫マップ」、「食べ物マップ」、「看板マップ」 など
- 形を決める…大きさ、立体 /平面、織り方、白黒にするかカラーか、文字だけか？
- 素材を集めて作る…IDEA R LABの material libraryで素材を集めて形にしていく
- 完成! 発表会

参加者コメント

・玉島の「まち」を歩き、古いもの、今のもの、これからのものなど様々なものを見ることができ、とても楽しいイベントでした。（60代 /女性 /会社員）
・普段違う分野の方と交流をすることが少ないので、貴重な経験になりました。今後の仕事にも生かせると思います。（40代 /女性 /会社員）
・アート・デザインという世界はこれまで苦手と思って避けてきましたが、今回自分の自由な発想を形にしていく楽しさを体感することができました。（60代 /女性 /社会教育指導員）

講師コメント

参加者が表現手法ではなく「何を伝えたいか」に視点を置いて制作していたのがとてもよかった。以前は「知識や体験が大切」とよく言われていたが、今では知識はすぐに調べられるし、体験も気軽にできるようになった分、見たつもり・やったつもりでいることが多いように感じる。本当は、体験した後に「考える」ことが重要で、それが今回のワークショップでは皆ができていたと思う。（黒田）

ひとりずつそれぞれにマップを作っていたら全く違った形になっていたはず。偶然できたチームで出会ったメンバーとこんなに面白いものができた、という経験は特別なこと。これをきっかけに、自分が住むまちでも様々な視点から発見を繰り返していけば、その周辺だけでなく、旅先でもその土地の理解が深まり、より一層楽しめると思う。（川路）

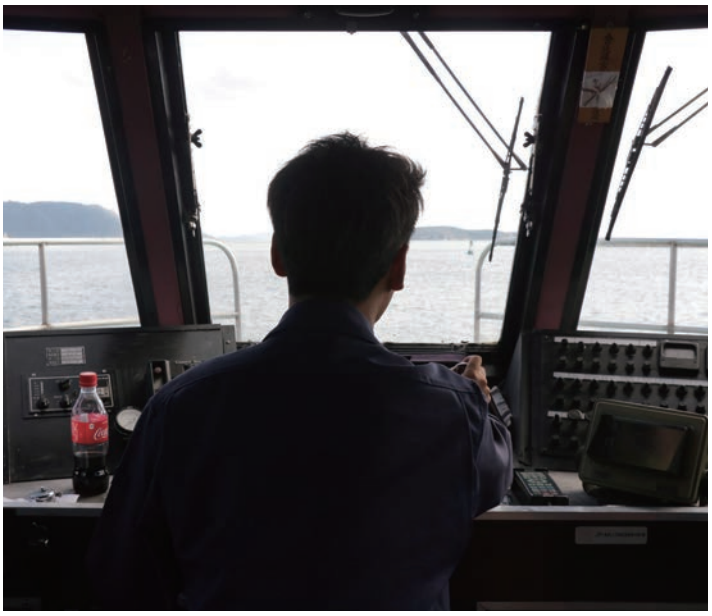
テキスト：木下志穂

文化芸術交流実験室12

海から見る岡山

日時：2018年10月20日(土)11:00〜16:00
開催地：松島分校美術館（倉敷市下津井松島2563）
講師：髙原次郎兵衛正伸（建築家、うなぎ漁師）
在間宣久（前岡山県立記録資料館 館長）
加瀬野久志（船模型製作家）

古来から交通の大動脈として行き来が盛んであった瀬戸内海。海外と日本を結ぶ航路は、様々な文化芸術を私たちの暮らしにもたらしました。北前船が寄港した町は商業活動が活発になりました。鉄道の整備に伴い海運は衰退していきますが、島々を巡り作物を集荷したり、石や砂利などの港湾整備の材料を運ぶ焼玉エンジン搭載の木造機帆船は、瀬戸内海らしい海運の象徴でした。そんな昭和の海側から陸を眺め、私たちが失ったもの、そして、いまだに持ち続けているものを、豊富な映像や写真資料を見ながら考えてみます。



髙原次郎兵衛正伸…1962年玉野市生まれ。久保田晃建築研究所を経て、1994年高原正伸建築設計事務所設立。2004年に福岡、2010年に岡山へ活動拠点を移す。2018年児島湾淡水漁業組合漁業権取得。SDレビュー 2014（自邸「54帖の中庭」）入選など。

在間宣久…1945年備前市生まれ。岡山大学教育専攻科修了後、小学校勤務を経て、岡山県総務部県史編纂室で『岡山県史』の編纂にあたる。2005年に開館した岡山県立記録資料館に勤務し、公文書・古文書などの収集・整理。岡山市などの自治体史にも関わる。

加瀬野久志…1948年生まれ。岡山理科大学化学科卒業。祖父が営む造船所で育つ。会社勤めをしながら瀬戸内の太鼓台の出る祭り、木造船の写真を撮り歩き、写真集『滅びゆく機帆船』を自費出版。定年退職後、木造船等の模型を仕事として製作している。

レポート

この日の会場は、普段は定期船が出ていない松島。児島観光港から船をチャーターして、ゲスト・参加者が一緒に移動。廃校を活用したスペースでお話を聞き、多くの資料と出会うことができました。

児島観光港からチャーター船で松島へ移動

高原さんは、玉野の八浜生まれ。自分が生まれる少し前（1959年）に児島湾に締切堤防が設けられ、水辺の風景が変わってしまったこと、それまでは岡山市の京橋（旭川）から、倉敷川経由で玉島まで航行できたこと、高原家のルーツは瀬戸内海の直島にあることなど、自らのルーツを交えながら、かつての海の風景と、その魅力について語ってくださいました。福岡の糸島にいた時に、興味が高じて木造船を譲り受けて自ら補修。船旅で岡山へ戻ってきたそうです。小型の船は、江戸時代の帆船くらいの速度で、1日にほどよく進める 30海里（約 55km）を目安に北前船の寄港地があること、陸や橋を走る車や鉄道がひどく忙しく見え、海上が本来の自然なペースであることなどを実感できたそうです。

加瀬野久志さんの写真に見入る参加者

在間さんは、海辺の寺社や港、墓地などにある石造物や、関連資料を通して港や水運の様子がどのように見えてくるのかを語ってくださいました。玉島の羽黒神社などの玉垣（囲い）には寄進を受けて刻まれた文字があり、函館、秋田、能登輪島、京都、大阪などといった地域との取引があったことが読み取れるそうです。牛窓には、九州から多くの杉材が運ばれ、木造和船の構造材として重宝されたそうです。港はその地理的位置や背後地の産業との関わりから特徴を持ち、時代の変化も受けて変わっていくとのこと。水運は鉄道の登場を受けて決定的に廃れたと言われていますが、積荷を石炭などに変え、焼玉エンジンを積んだ機帆船の登場によりその後も産業に寄与していったのです。

加瀬野さんは、今では見ることのできなくなった昭和の時代の木造船や、造船の様子をおさめた写真、8mmフィルムで撮影した進水式の様子、自らが制作している船模型を紹介する映像などの資料を見せてくださいました。小型船の上からしかける四つ手網漁、進路保持のための小さな帆だけがついた貨物船、積荷が沢山でも重心のとりやすいみかん船、島をめぐりながら醤油を売りまわる醤油船、転倒するように船体を傾け海中に石を落とす石船など、実に様々な船があったことがわかりました。

左から髙原さん、在間さん、加瀬野さん

参加者の中にも、ヨットで旅に出かけている方、島めぐりが好きな方、港で生活されている方などがいて、皆さんにも海や船との関わりや思い、今日の話を通して感じたことなどを話していただきました。

ヒト・コト・場所

松島分校美術館

倉敷市の児島地域活性化事業の一環として、瀬戸内海のたもとに浮かぶ、周囲約 1.2kmの小さな島にある廃校を活用する事業。1902年に下津井西小・下津井中学校松島分校として創設され、休校をはさみ 2000年に廃校となっていた施設を改修し、下津井港で 2015年より私設美術館「吹上美術館」を運営していた一般社団法人クリエイターズラウンジらが 2019年 4月からを予定している本格活用の準備を進めている。作品の発表よりも制作拠点としての機能を重視しており、アニメーションのコマ撮りができる暗室や、宿泊設備などを備えている。

瀬戸内海国立公園

1934年に雲仙、霧島とともに、日本初の国立公園として指定された。当時の指定区域は寒霞渓（小豆島）、屋島、鷲羽山、鞆の浦・沼隈町周辺の備讃瀬戸一帯のみであったが、後に数回区域が拡張された。現在は、西は北九州市、東は和歌山市まで 1府 10県に跨る広大な公園となっている。大小数々の島で構成された内海の多島海景観が特徴。古来より陸上交通が発達するまで、瀬戸内海は国内外を結ぶ海上交通の大動脈であり、北前船や朝鮮通信使なども来航し、港町が繁栄した（牛窓・下津井・鞆の浦・尾道・御手洗・室積など）。また、複雑な潮流と地形であるため、操船に長けた塩飽水夫や村上水軍が活躍し、その拠点には数多くの遺構が残されている。

下津井わかめ

下津井沖の急な流れに揉まれて育ったわかめで、薄さと柔らかさに特徴がある。採れた生のわかめを丁寧に洗い、そのまま天日で干した「素干しわかめ」としているが、多く流通しているものは異なり、調理の前に水で戻す必要がないくらいに薄く、少しの水分で柔らかくなる。瀬戸内海は瀬の浅いところが多いが、下津井はさらに南北が狭い海域であり、東に播磨灘、西に燧灘（ひうちなだ）と広い灘に挟まれている。そのため、潮の満ち引きで 1日中早い流れにさらされる。歯ごたえのある蛸が育つのもこのため。

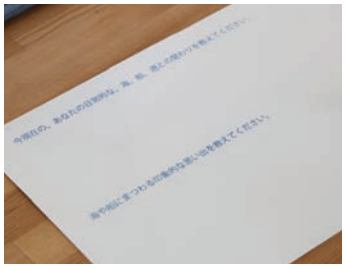
ワークショップ

ランチ

児島の手づくりお惣菜・お弁当の「おかずや」さんのお弁当に加え、下津井生まれの余傳（よでん）吉恵さんによるわかめスープがふるまわれました。下津井わかめの特徴も説明いただき、会場の窓辺や、すぐ外の海辺など、瀬戸大橋を望むことのできる景色を眺めながらのランチタイムとなりました。

海や船について話し合う

・ワークシートを配る。
・「今現在の、あなたの日常的な、海、山、船、港との関わりを教えてください。」「海や船にまつわる印象的な思い出を教えてください。」という項目にそれぞれで答える。
・ワークシートをもとに、参加者みんなで話し紹介しあう。



参加者コメント

・会場のロケーションと内容がぴったりで、ゆったりと心地よい時間が過ごせました。（40代 /女性 /編集・出版）
・松島を初めて知り、海、島、船、石について知らなかったことをたくさん聞けてよかったです。（60代 /女性 /会社員）
・海からみると、岡山と他の場所のつながりや、生活のかたちなど、また違った世界が見えて面白いと思いました。（20代 /女性 /店舗運営）

講師コメント

8年前、木造伝馬船で福岡糸島から岡山八浜までを航海した折に立ち寄った松島で海にまつわる話ができたことをうれしく思います。また、歴史をつなぐ意味で瀬戸内海の英雄、藤原純友を祀る純友神社のことを多くの人に知ってもらえたことも有意義なことでした。（高原）

港には人と物資が集まり、各地域の産業と深く結びついています。一口に港と言ってもそれぞれの港によって性格が異なっていることに気づきました。それを教えてくれたのが、灯篭や寺社の玉垣などの石造物でした。古文書などの記録だけでなく、何気ない身近なものたちに歴史の姿を垣間みています。（在間）

海も穏やかで青空の下で木造船の話をするには最高の場所でした。会場の反対側は、平成半ばまでは機帆船等が沢山の船が行き来する航路でした。昼食は海辺に出て食べられる人もおり、また島の反対側には歴史を感じさせる神社があり駆け足でみにいく人もおり、楽しい 1日を過ごしていました。（加瀬野）

テキスト：橋本誠（ノマドプロダクション）

文化芸術交流実験室13

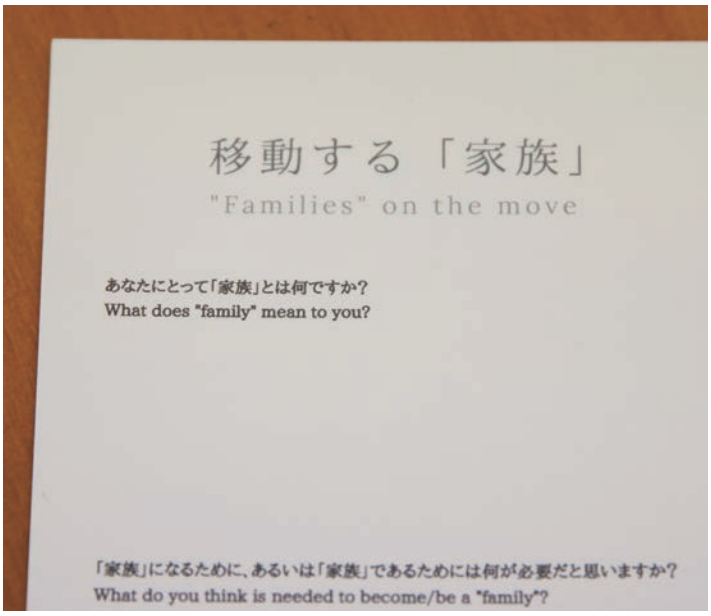
岡山の中の異文化コミュニティー

日時：2018年10月28日(日)11:00～16:00
開催地：きよね夢てらす（総社市清音軽部666-6）
講師：譚俊偉［タンシュンワイ］
（総社市役所 市民生活部 人権・まちづくり課 国際・交流推進係）
大橋香奈（研究者、慶応義塾大学大学院政策・メディア研究科助教）

総社市には海外からやってきた方々が多く住んでいます。彼らにとって大切な住民同士の交流を促す総社インターナショナルコミュニティ（元・総社ブラジリアンコミュニティ＆インターナショナルフレンズ）の活動は、どのように生まれてきたのでしょう。20数年前ブラジルからやってきて、今は総社市役所の職員として働く譚俊偉さんと、国境を越えて移住した人びとが、どのように母国（あるいは他国）にいる「家族」とのつながりを維持しているのか、映像を用いて調査研究を進めている大橋香奈さんとの対話から考えてみたいと思います。

譚俊偉…1973年生まれ。ブラジルでスペイン語が堪能な中国人の父とブラジル人の母の間に生まれる。地元大学で国際経済と英語を学び、結婚を機に 1996年、妻と来日。岡山市内でゴルフ場のキャディーや派遣会社の通訳をしながら日本語を学ぶ。2009年から多文化共生推進員として総社市に雇用される。2010年にはブラジル人住民組織「総社ブラジリアンコミュニティ」（現・総社ブラジリアンコミュニティ＆インターナショナルフレンズ）を立ち上げ会長に就任。ブラジル人のみならず、外国人の幅広い相談を受ける。

大橋香奈…女子美術大学非常勤講師。サントリーホールディングス（株）で健康食品のマーケティングに従事した後、フィンランドでの活動を経て、英国の Met Film Schoolドキュメンタリーフィルム制作プログラム修了。国内外で 20回の引っ越しを経験したことから、博士課程で「移動」の経験と「家族」のあり方に関する調査研究をしてきた。



レポート

午前中の主役は、これまで国境をまたがる「家族」の関係の研究をされてきた大橋さん。その研究の中で制作した映像作品『移動する「家族」』を最初に鑑賞しました。登場する5人の研究協力者は、「家族」と異なる国で暮らしている人たち。この作品は、彼／彼女が語るここにたどり着くまでの物語や遠い国で暮らしている「家族」との関係を映し出します。上映後は、コーディネーターの大月さんとのトーク。大橋さんがこの研究を始めたきっかけはご自分の家族の事情でした。母親が 6 歳のとき、祖母が再婚するために母親を日本においてアルゼンチンに渡ったことや、中学生の時にご両親が離婚して父親が蒸発してしまったことから、「自分の家族は不完全な家族」だと思ったそうです。その時の「あるべき家族の型」を押し付けられることへの苦しみが、今の研究に反映されているそう。制作した映像作品は、暮らしかたが違う人たちを「型から外れたもの」としてではなく、それぞれに理解していくことの重要性を伝えています。

制作した映像作品について語る大橋香奈さん

ブラジル料理のランチタイムを挟んで、午後は譚さんのプレゼンテーションから。移住してきたひとりの外国人として、日本で譚さんが気づいたのは「その国のイメージ」が及ぼす力。世界地図を見ながら、参加者に「行きたい国 / 行きたくない国はどこか?」を訪ねました。何人かに聞くと、皆行きたくない国には悪いイメージを持っていました。しかし譚さんは、実際にそこに関わってみないとわからないことがたくさんあると語ります。さらにどんな人でも、国や文化に関係ない、人間共通の分かり合える部分があると続けました。他にも「郷に入っては郷に従え」というのはきつい言葉で、ルールを教えてくれないと、外からやって来た人はわからない。多文化共生員として、日本人と外国人どちらにも互いの文化やルールを教えあうことを大切にしている。異なる文化の人とも「その人として」接することで、色々な違いを乗り越えることが、私たちが多文化社会で生きるために必要だと考えている。というお話などをうかがいました。

譚俊偉さんによる熱いプレゼンテーション

この日は総社インターナショナルコミュニティ（元・ 総社ブラジリアンコミュニティ &インターナショナルフレンズ）のみなさんもいらして、国際的な顔ぶれの実験室となりましたが、途中に行った「家族」について話し合うワークショップも盛り上がり、プログラムが終わる頃には、新しい絆が生まれていました。大橋さんと譚さん、どちらにも共通するテーマは「違っている人同士でも、その人をその人として扱う大切さ」。最後に撮影した集合写真には、同じ岡山で生きる人たちの笑顔。様々な文化の違いを越えて、テーマが参加者に伝わった証かもしれません。

プログラムの終わりに参加した皆さんとの記念写真

ヒト・コト・場所

総社インターナショナルコミュニティ（元・総社ブラジリアンコミュニティ＆インターナショナルフレンズ）

2010年 7月に譚俊偉さんが中心に立ち上げた「総社ブラジリアンコミュニティ」が母体。当初はブラジル人のみコミュニティだったが、総社に住む様々な外国人の要望に応え、「総社ブラジリアンコミュニティ&インターナショナルフレンズ」を経て、2018年 4月より「総社インターナショナルコミュニティ」となる。相互扶助の精神に基づいて、地域社会で自立して生活することを手助けする組織。イベントなどを企画運営することで、地域との連携や情報発信を行っている。

きよね夢てらす

総社市清音、清音小学校横にある文化拠点。2004年 4月に特定非営利活動法人として発足。多目的ホールや運動施設、会議室などを持ち、誰でも自由に使うことができる。（多人数の使用には予約と別途の使用料が必要）文化やスポーツなどを後世に引き継ぎ、地域住民の文化意識を支えることを目的に様々なイベントや活動を開催している。

総社市

かつての吉備国の中心で、備中国分寺などの史跡が多く残っている地域。県内では岡山市・倉敷市・津山市に次いで多くの人が暮らしている（約 67,000人 /2018年 2月）。三菱自動車を中心とした部品工場が集積した地域があり、ブラジル人・ペルー人をはじめ多くの外国人労働者も居住している。2009年のリーマン・ショックの影響により、解雇された日系ブラジル人等の相談業務等に取り組むなかで、就労問題だけに留まらず、生活全般に関わる自立支援を行う目的で人権・まちづくり課内に国際・交流推進係を新設。「国籍を越えた多文化共生のまちづくり」をキーワードに、外国人市民の声を反映した多文化共生事業を展開している。写真提供：岡山県観光連盟

ワークショップ

ランチ

譚さんお手製のブラジル料理、フェイジョンをご飯にかけていただきました。上にかかっている黄色い粉はキャッサバ（タピオカの原料となる芋）を粉にしたファロファ。遠いブラジルのことを思いながら、他の国の食文化を学ぶこともできる非常に有意義なランチタイムでした。

「家族」について話し合う

・ワークシートと紙を配る。
・ワークシートの「あなたにとって家族とはなんですか？」「家族になるために、あるいは家族であるためには何が必要なだと思いますか？」という問いに、まずは 1人で考えて、書いてみる。
・ワークシートをもとに、「どんなことを書いたのか、なぜそう思ったのか」をグループに分かれて、話せる範囲で話し合い、シェアする。
・グループごとにどんな話をしたのか紹介しあう。

参加者コメント

・家族についてあらためて考える機会になり、楽しかったです。（20代 /女性 /学生）
・映画でいろいろ感じました。違う文化がひとりひとりに内在しているから、面白い。（30代 /女性）
・アーカイブの必要性や編集の切り口等、普段気づかないことについて考えることができてよかったです。（女性 /自営業）
・日本人と外国人とが交流できました。ランチが美味しかったです。（40代 /男性 /公務員）

講師コメント

みなさんが、私が作ったご飯を美味しそうに食べてくれてよかった。いろんな国籍の人がいたけれど、みなさんがなんとかコミュニケーションしてくれて、それを見ていて本当に嬉しかった。参加者の皆さん、スタッフの皆さんも含めて、なんだか新たな家族になれたような気がします。（譚）

普段あまり家族について話す機会はないと思いますが、人により家族との関係が複雑な場合や時期があると思いますし、それを内側に抱え込むのは私の経験上辛いことだと思います。映像作品の登場人物や他の人のストーリーを通じて何となくそういうことを話すきっかけや勇気になっていたら嬉しいです。（大橋）

テキスト：高橋大斗

文化芸術交流実験室14

建築探偵団 其の弐『団地』

日時：2018年11月3日(土・祝)11:00〜16:00
開催地：住吉町の家 分福（倉敷市中央2-13-3）、老松団地（倉敷市老松町3-2-1）
講師：石田尚昭（建築家、岡山市スポーツ・文化振興財団 常務理事）
　　菊地マリエ（公共R不動産 コーディネーター）

1949〜 1952年にかけて造られた老松団地は、現在では募集を停止している空き家率の高い団地となっていますが、住空間に加え植栽や駐車場など、豊かな環境も大変魅力的です。県営と市営の団地が隣接している点もユニークで、公営住宅史において標準型が生まれる直前の貴重な建築としても注目に値します。ワークショップではフィールドワークをもとに、老朽化した団地の未来を考えたり、今後に向けて私達はどのように住まいを整えていけばいいのかなど、一緒に考えてみたいと思います。

石田尚昭…東京理科大学大学院工学研究科建築学専攻修了。1980年岡山市役所入庁（建築職）後、庭園都市推進課長、都市整備局審議監（都市・交通・公園担当 ）として、市民協働による西川緑道公園の活用事業（西川パフォーマー ）や旭川かわまちづくり事業(さくら道桜の保全他)を手がける。2016年退職。岡山市都市整備局まちづくりアドバイザー、国立大学法人岡山大学地域総合研究センター研究員・アドバイザー

菊地マリエ…国際基督教大学教養学部卒業。(株)日本政策投資銀行、「日本で最も美しい村連合」特派員を経て 2015年からフリーで公共 R不動産立上げ、(株)アフタヌーンソサエティにて都市経営コンサルティング、(株)リノベリングでリノベーションスクールの運営、東北芸術工科大学と地域温供給型エコハウス住宅開発等、多数の公民連携プロジェクトに関わる。『公共 R不動産のプロジェクトスタディ』(学芸出版、2018)ほか

レポート

この日は、倉敷美観地区にほど近いコワーキングスペース「分福」を拠点として、午前中にレクチャー。昼食を挟んで倉敷駅近くの老松団地を見学の後、「分福」に戻りワークショップを行いました。

まずは石田さんより、日本や岡山にどのような団地があるのかという基礎的なお話しをしていただきました。団地と言えば、広くは民間社宅などが含まれることもありますが、その多くは日本住宅公団（現・都市再生機構）や地方公共団体により建てられた公営（県営・市営）住宅を指しています。その目的は、住宅に困窮する低額所得者や高齢単身者に対して、安い金額で住居を提供することでした。鉄筋コンクリート、コンクリートブロック、木造など造りにより耐用年数が定められており、高層住宅、5階建程度の階段室型、2階建のテラスハウス、星型のスターハウスなどいくつかの典型的なタイプがあるそうです。老松団地は 1952年造。倉敷では他に中庄団地などが知られています。

団地の説明をする石田尚昭さん

続いて菊地さんより、日本の公共施設の状況と、それらを今後どのように活用できる可能性があるかというお話です。その多くはバブルの時期につくられていて、耐用年数が経過したものなどに更新投資が必要になってきています。しかしどの自治体も人口減少・高齢化・老朽化・財政難に悩まされている状況。そこで菊地さんがコーディネーターを務める公共 R 不動産では、国内外各地の事例を参考にしながら、その施設や立地の特徴や強みを再発掘し、民間の事業者など行政だけによらない活用の仕組みづくりなどに取り組んでいます。提案する立場からは、なぜ使いたいのかの意図をしっかりと伝え、管理コストが不要になる、家賃収入が発生するなどのメリットも提示することがコツだと言います。

老松団地の見学

午後は、老松団地の見学です。住宅街を歩いていくと、そこには広場や畑に囲まれた鉄筋コンクリート造 3 階建タイプのものと、コンクリートブロック造のテラスハウス、小さな集会所や倉庫が静かに佇んでいました。倉敷市担当課のご案内で入居者のいない内部も一部拝見。敷地や眺望、建物の状態、コンパクトな部屋のつくり、最近では見なくなったタイプの洗面台など、各々気になるところを確認しました。

「分福」に戻ってからは、団地をどのように活用することができるかの検討。階段室ごとに、小さな美術館や商店の集まりにしてはどうか、人の集えるカフェや滞在できる民泊はどうか、敷地を生かしたイベントをやり、地域のお店に出店してもらい交流できる場にできないか、などのアイデアが出ました。

ワークショップの様子

ヒト・コト・場所

老松団地

倉敷駅から徒歩 10分（倉敷市老松町）に位置する、1949〜 1952（昭和 25 〜 28 ）年にかけて造られた市営・県営の団地。ゆとりある敷地の中に、鉄筋コンクリート造 3 階建タイプ、コンクリートブロック造 2 階建のテラスハウスなど 5 棟の居住棟、小さな集会所や倉庫が静かに佇んでいる。コンパクトな住空間ながら、植栽や駐車場など豊かな環境も魅力的だが、現在では募集を停止していて、高い空き家率となっている。

住吉町の家 分福

1926（大正 15・昭和元）〜 1928（昭和 3 ）年頃にかけ、倉敷市住吉町に意匠を凝らして建てられた町屋建築を改修し、2018 年 3 月にオープンしたサテライトオフィス&コワーキングスペース。木造 2 階延べ約 240 平方メートルの建物に、テレワーク（情報通信技術を活用した、場所や時間にとらわれない柔軟な働き方）に対応した環境を備えたワークスペースやプレゼンテーションルームなどを備えている。利用登録により半日 500 円から利用可能。名前の由来は、建物内部から昔話「分福茶釜」をモチーフにした茶釜が見つかったことから。倉敷市の一般社団法人・高梁川プレゼンターレ、倉敷市、倉敷芸術科学大学などが連携して整備し、運営も同法人が行なって

公共R不動産

使われなくなった、もしくは今後使われなくなる（使用停止）公共空間の情報を全国から集め、それを買いたい、借りたい、使いたい市民や企業とマッチングするためのウェブサイト。「東京 R 不動産」などを運営する R 不動産株式会社が運営している。東京 R不動産ディレクター／株式会社オープン・エーの馬場正尊さんがディレクターを務めるほか、菊地マリエさんも運営メンバーのひとり。『公共 R 不動産のプロジェクトスタディ : 公民連携のしくみとデザイン』（学芸出版社、2018 ）でも様々な事例を知ることができる。

ワークショップ

ランチ

倉敷にある「創菜 style だべーる」さんのお弁当に、会場の「分福」さんからデザートのおまけ。参加者で大きなテーブルを囲んで、皆で美味しくいただきました。

公共空間を使う

・団地の敷地と外観、居住棟の内部（一部）を見学し、気になる点、魅力的な点などをワークシート（図面）にメモする。
・敷地、建物を公共空間ととらえて、現在の居住に限らない活用方法のアイデアをまずは 1人で考えて、付箋に書き出してみる。
・付箋をもとに、グループでアイデアを話し合い、シェアする。アイデアの組み合わせやブラッシュアップにより、活用案のより具体的なイメージを描く。
・グループごとにどんな話をしたのか紹介しあう。

参加者コメント

・建築がテーマなのに女性の参加が多く意外でしたが、だからこその楽しさがありました。（50代 /女性 /会社員）
・様々な意見、アイデア交換ができてとても良い刺激になりました。こんな団地があれば行きたいし、住みたいです。（40代 /女性）
・知らなかった地元のことを新たな視点から見て凝り固まっていた脳がほぐれた気がします。（40代 /女性 /会社員）

講師コメント

歴史・時代を感じることができる「団地」の体感を基に、楽しく活用の提案ができたと思います。古いだけではなく活用の仕方によっては多くの可能性を秘めた場所であることが確認できたのではないでしょうか。（石田）

現場の見学で建物の良さを共有してからワークショップができたので、笑顔で同じ未来を見ることができたようで楽しかったです。 団地は都会の中にある、時間が止まったような 、つくろうとおもってもつくれない空間。 地道な活動をつなげて残したい人が増えていけば、使えるようになるかもしれないということをぜひおぼえておいてください。（菊地）

テキスト：橋本誠（ノマドプロダクション）

文化芸術交流実験室15

価値を紡ぐ プロジェクトアーカイブ

日時：2018年11月16日(金)19:00〜21:00

※希望者のみ、翌17日（土）に直島でアーカイブ資料見学会を開催

開催地：東山ビル（玉野市宇野1-7-3）

講師：金廣有希子（公益財団法人 福武財団 アーカイブ・セクション リーダー）
多田智美（編集者、株式会社MUESUM 代表）
橋本誠（アートプロデューサー、一般社団法人ノマドプロダクション 代表理事）

文化芸術活動の価値を広く届け、後世にも伝えるためには、活動そのものについてはもちろん、関連する様々な情報を記録・整理して、アーカイブ資産にしておくことが求められます。記録・アーカイブに関する基礎的なショートレクチャー、瀬戸内海の島々で展開されるベネッセアートサイト直島の事例紹介、備前を含む六古窯の情報発信などに関わってきた編集者を交えたディスカッションを行い、文化芸術だけではなく、まちづくりや教育・福祉的観点からの価値も視野に入れて考えます。

金廣有希子…東京藝術大学音楽環境創造科卒業、2007年よりベネッセアートサイト直島の企画・運営を担う福武財団に勤務。広報、学芸、教育普及、エデュケーション・プロジェクト、アート作品の制作管理などを担当。2015年、アーカイブ・セクションを立ち上げる。

多田智美…「出来事が生まれるところからアーカイブまで」をテーマに、アートやデザイン、福祉、地域など、さまざまな分野の書籍やタブロイド、WEB、展覧会やイベントなどの企画・編集を手がける。共著に『小豆島にみる日本の未来のつくり方』(2014年 /誠文堂新光社)

橋本誠…東京・埼玉・岡山育ち。横浜国立大学卒業後、東京文化発信プロジェクト室（現・アーツカウンシル東京）を経て 2014年にノマドプロダクションを設立。多様化する芸術文化活動に関わる企画制作や広報・記録に関わるプロジェクトなどを手がけている。

レポート

今回の会場は、直島や小豆島へ向かうフェリーが行き交う宇野港のすぐそばに佇む東山ビル。古い雑居ビルを改装した空間に、県内外からアートプロジェクトに興味をもつ約 30名が集まりました。

まずは橋本さんが、「記録」と「アーカイブ」に求められることについて提示。文化芸術活動において記録は、客観性を保ちつつ、その場でしか鑑賞・体験できない状況や価値、かたちにならない表現やエピソードを残すことがポイント。また、アーカイブは、記録が整理され使える状態になっていること、それらが編集され、価値が人に伝わるように活用されることがポイント。つまり、記録とアーカイブの意義は、文化芸術の価値を社会に還元し、公共財化することであるとまとめました。また、データの保管方法やアーカイブの汎用性を高めるために公開されている様々なツールやキットも紹介しました。

続いて、金廣さんよりベネッセアートサイト直島のアーカイブ事業の紹介。長年様々な事業を手がけてきた一方、作品の制作プロセスや、地域の方々・来場者とのエピソードなどに関わる記録・資料が散在し、どのようなものが存在しているのか、全容が把握できない状態だったそうです。そこで、海外の芸術祭や国内のアーカイブ関連団体などの取り組みを学びながら、過去 30年分の資料整理に着手。目録を作り、アナログ資料のデジタル化も進めています。それらは広報や研修、修復など様々な場面で活用されているそうで、アーカイブが事業を継続するエンジンとなり得るとの所感が共有されました。

最後に、多田さんからアーカイブを活用する編集者の視点で話を伺いました。様々な人々が関わるプロジェクトに携わる中で、プロジェクトのアーカイブからさらに新しいプロジェクトが生まれていく循環を意識し、「今はもちろん、未来に仲間を見つける視点で紡ぐこと」を大事にしているといいます。また、既にある文献・資料と出会うきっかけづくりとしての視点、100年、1000年といった長いスパンで活用されることを見越すのであればあえてそのまま残す視点も時には必要であり、「編む」と「ほぐす」の両方の技術が重要になるのではないか、という指摘に、腑に落ちた表情の参加者が多くいました。

翌日は希望者と共に金廣さんの案内で直島を訪問。トークで話題となった作品などを見た後に、アーカイブ資料が整理・保存されている非公開スペースの様子や、作品に関する住民の方へのインタビュー映像資料なども見せていただきました。この体験からの気づきや、記録・アーカイブの意義や活用方法について、皆で共有したり、ディスカッションする有意義な時間を過ごしました。

夜の東山ビルはムーディーな雰囲気

講師の3人。互いに驚きや発見で笑顔がこぼれます

アーカイブ見学会での意見交換

ヒト・コト・場所

東山ビル

1966年に宇野港に臨んで建てられた雑居ビル。港の衰退に伴い数 10年空きビルとなっていたが、2012年に芸術系イベントで活用され、2014年頃から移住者である西野与吟氏らの手により本格的な DIY再生が行われている。ホステル、ジュエリーショップ、コーヒースタンドなどが入り、屋上ではビアガーデンや映画上映、音楽ライブなどのイベントが行われるなど、若手クリエイターやアーティストの交流の場となっている。

日本六古窯

古来の陶磁器窯のうち、中世から現在まで生産が続く代表的な 6つの産地（越前・瀬戸・常滑・信楽・丹波・備前）の総称。1948年頃、古陶磁研究家・小山冨士夫氏により命名され、2017年春に日本遺産に認定された。それを機に、岡山県備前市を含む、産地を有する六市町では六古窯日本遺産活用協議会を発足。2018年春に始動した「旅する、千年、六古窯」では、クリエイティブチーム（エディトリアルディレクターに多田智美氏ほか）を結成し、備前焼をはじめとした六古窯の歴史や魅力を新たな視点で紹介している。

写真：タブロイド「旅する、千年、六古窯 前編（六古窯を知る／学ぶ号）」

ベネッセハウス　写真：山本糾

ベネッセアートサイト直島

直島・豊島・犬島を舞台に、株式会社ベネッセホールディングスと公益財団法人 福武財団が展開しているアート活動の総称。美術館と宿泊施設が一体となった「ベネッセハウス」、直島の本村地区の集落でアーティストが空間そのものを作品化する「家プロジェクト」、近代化産業遺産を活用した犬島精錬所美術館、アート・建築・環境が一体となった豊島美術館など、多彩なプロジェクトを展開。瀬戸内海の風景の中、ひとつの場所に、時間をかけてアートをつくりあげていくこと―各島の自然や、地域固有の文化の中に、現代アートや建築を置くことによって、どこにもない特別な場所を生み出していくことを基本方針としている。

ワークショップ

軽食

開場とともに、東山ビルの 1Fに入居する #8 WIRE（ナンバーエイト ワイヤー）のハンバーガーと、BOLLARD COFFEEのコーヒーを提供

アーカイブ資料見学会　※参加者数：11名

9:10　宇野港フェリー切符売り場集合（9:22発のフェリーで直島へ移動）
9:43　宮浦港 着（9:46発の町営バス・シャトルバスでベネッセハウスへ移動）
10:08　ベネッセハウス ミュージアム下 着
　　ベネッセハウス鑑賞（主にヤニス・クネリス、リチャード・ロング、安田侃 ）
11:09　ベネッセハウス ミュージアム下 発（シャトルバス・町営バスで本村へ移動）
11:36　農協前 着
　　家プロジェクト「角屋」 鑑賞
　　本村ラウンジ &アーカイブ（アーカイブ資料見学、意見交換など）
13:15　終了・解散

参加者コメント

・全国のアートやデザインの現場でのアーカイブ資料について知れてよかったです。（30代 /女性 /自営業）
・アーキビストの情報の管理方法について、大変参考になりました。（20代 /女性 /編集アシスタント）
・アーカイブの必要性や編集の切り口等、普段気づかないことについて考えることができてよかったです。（女性 /自営業）
・アーカイブについて「編むとほぐす」 の両方から具体的事例をもとに考えることができ、良い機会になりました。（30代 /男性）
・これまでアーカイブを現に所有している者からの視点しか持たず、それをほぐすという発想はなかったので、とてもよかった。（50代 / 男性 / 地方公務員）

講師コメント

図書館のように、アーカイブは探しやすさ・使いやすさの点ではあるルールに基づいているのが重要だが、出会い方の印象深さでいうと意図的に編集されているものの方が良い場合もある。それぞれ性格が異なり、多様な可能性があるとあらためて感じた。直島の見学会では、アーカイブ活用の様子を感じつつ、アーカイブ自体を扱いながら見せる場のあり方を考えたくなった。（橋本）

現状自分はアーキビストとして、ルールに則って整理しているが、今日の多田さんの発表では編集の力を感じた。財団で今後情報を編集して発信する際に、誰に届けるかを意識したい。また、社内外の人が様々な視点で使うことができる、つくり手の創造性を刺激するようなアーカイブにしていきたい。（金廣）

人は、なぜプロセスに心を動かされるのだろうか、と考えさせられた。また、記録の中でも写真は情報量がとても多いので、一瞬にしていろんなものが読み取れる。写真の中でも、単に作家や作品だけでなく、そこで使われているテーブルがどういうものだったのか、など、違う引き出し方ができるはず。“タグづけ”の方法を考えたい。記録はどんなふうにも使えるはずだし、遠い未来の今とは違う使われ方を想像すると面白い。（多田）

テキスト：木下志穂＋ノマドプロダクション

文化芸術交流実験室16

アーティストが作った料理 作家が作った料理

日時：2018年12月1日(土)15:00〜19:00
開催地：クレド岡山（岡山市北区中山下1-8-45）
講師：杉本克敬（バリスタ、ネイバーキッチン主宰、EXCAFE 代表）
　　新藤信（日本パウル・クレー協会 代表）

パウル・クレーやサルバトール・ダリなどが残したレシピをみると、その人となり、生活のリズムや傾向、それぞれの作品を支えている哲学が見えてきます。文学者にも食にこだわる人が多いのも周知の事実。岡山県ゆかりの作家内田百間等が書き残した、作品に出てくる郷土料理にはなにがあるでしょうか？創作は料理作りにも通じるところがあります。「つくること、たべること」を通じて創造的な場作りをしているネイバー・キッチン主宰者をナビゲーターに、ワークショップではパウル・クレーの料理メモを元に、料理作りにチャレンジします。

杉本克敬…1978年岡山県生まれ。2007年「カフェは日常の文化施設」をコンセプトにEXCAFEを設立、バリスタとして日々カウンターに立つ。近年は県内のアートイベント、芸術祭等に「食」を切り口とした作品を展開。そこで行き交う人々の「口を開ける」きっかけを作り、場から生まれる「対話」を通じて、暮らしや文化、記憶などを手繰り寄せる活動を継続している。2016年から「ネイバー・キッチン」を企画している。

新藤信…1950年東京生まれ。高校卒業後、劇団四季演劇研究所で舞台芸術を学ぶ。画廊勤務を経て 1973年にフリーランス ・キュレイター／コーディネーターとして独立。日本で初めての「M.C.エッシャー展」（1976年）「エゴン・シーレ展」（1979年）などを手掛ける。1980年以来画家パウル・クレー遺族と親交を結ぶ。著書に『芸術の非精神的なことについて』（勁草書房 1995年）『クレーの旅』（平凡社 2007年）『クレーの食卓』（講談社 2009年）など

レポート

会場は、岡山市の中心部にあるショッピングビル、クレド岡山。エスカレーターすぐ横の買い物客が行き交うオープンカフェがいつもと違う空間になり、なにやら美味しそうな料理が並んでいます。文学や料理に興味があるという幅広い年代の方々が集まりました。

会場は人が行き交うエスカレーターのすぐ隣

まずは杉本さんから、ネイバー・キッチンの活動について紹介がありました。クレド岡山の近くでカフェを営む杉本さんは、バリスタとしての技術や調理の経験を活かして、2年ほど前から大人も子どもも同じ空間で料理を作り、それを食べる場づくりに取り組んでいます。その思いの底にあるのは、「料理には失敗はない」ということ。決まったレシピや何かの料理をめざして作ると、出来不出来に差が出てしまいます。でも、本来料理のゴールはひとつではなくて、みんながそれぞれの完成をめざすものであると杉本さんは言います。今日は、食そのものに文化や芸術を感じ、みんながそれぞれの完成をめざして作って食べることを楽しもう、という呼びかけに、参加者の期待も高まりました。

クレーと料理のエピソードを話す新藤さん

次に新藤さんから、パウル・クレーの人となりや暮らしぶりについて話を伺いました。長年クレーの著作に触れ、遺族と親交を結んできた新藤さんは、クレーを「緻密で真面目な性格」と表現。幼少期から 40歳前後までマメにつけられた日記から、その性格や暮らしぶりを軽妙に語ってくれました。また、自身が手がけた本『クレーの食卓』で、売れない画家時代に主夫として家事や料理を担っていた料理レシピに触れ、「誰かのために作る」という点で芸術家と料理人の仕事は似ていると指摘。また、内田百間の『御馳走帖』から「缶詰」をひき、クレーと百間との物事を観察する視点の共通点を探ったり、バイオリンがプロの音楽家並みの腕前だったクレーにゆかりの作曲家や楽曲エピソードなど、楽しい話が尽きません。

出来上がったスープの材料や作り方を発表

ワークショップでは、まず杉本さんが用意をしたスープを試食し、なんの食材が、どんな風に調理されているかをグループごとに考えます。そうして決まったレシピを元に、みんなで調理。同じスープを味わったはずなのに、選ぶ食材や調理方法がグループごとに少しずつ違っていて、異なる味の3種類のスープが完成しました。会場に並べられたクレーや百間にゆかりの料理を取り分けて、一緒に試食しながら、お互いの味の違いを比べてみたり、どうすればもっと美味しいか、普段どんな風に料理しているかなどを話したり、参加者同士で会話が弾みました。

ヒト・コト・場所

ネイバー・キッチン

「ツクル・キッチン」と「タベル・キッチン」の2つのキッチンを通して、子どもも大人も普段の暮らしの中に「つくること、たべること」の機会を取り入れてもらおう、という取り組み。「ツクル・キッチン」では、毎回異なるテーマで調理を行い、作った料理は「タベル・キッチン」で実食。それぞれが作った新しい味に出会い、感想を語り合うことで、自分が食べたいものを自分で作ってみるきっかけとなることをめざしている。また、「今回の近くの誰か（Neighbor）の参加費で、次回の誰かの1食を提供する」というコンセプトで参加費は全額次回以降の運営費とし、これが名称の由来となっている。

内田百閒

小説家、随筆家。本名内田栄造。1889年（明治 22年）、岡山市古京町の造り酒屋「志保屋」の 1人息子として生まれた。岡山中学校から第六高等学校、東京帝国大学へと進む。大学在学中に夏目漱石門下となり、卒業後はその独特の観察眼で多くの作品を残した。美食家、無類の酒好きで、その様は『御馳走帖』（中央文庫）『餓鬼道肴蔬目録』に詳しい。上京してからは「帰ると記憶に残る古里のイメージが崩れてしまう」とほとんど岡山に帰らず、82歳で生涯を閉じた。岡山市古京町に生家跡の碑、小橋町1丁目の旭川堤に記念碑園、瀬戸町南方三谷公園に句碑がある。百閒のペンネームは幼い頃に遊んだ百間川にちなんでいる。

大手まんぢゅう

1832年（天保 8年）から伝わる岡山を代表する和菓子。当時の備前（岡山）藩主池田候が好んでお茶席で愛用したという。「大手まんぢゅう」の名称も、岡山城大手門近く（京橋）で作られていたため池田候が名づけたと伝えられている。備前米を材料とした糀などから作る甘酒を使用した生地で、こし餡を薄く包み、蒸しあげる製法で作られている。原料には名水である雄町の水も使用されており、現在の工場も雄町（岡山市中区）にある。上品な甘さで、内田百間も随筆で幾度も言及している。

ワークショップ

大麦のスープ

①グループわけ…7人〜8人ごとに、3つのグループにわかれる。
②スープの味を感じる…『クレーの食卓』に登場するレシピを元にしたスープが配られる。最初の一口を誰かと食べさせあいっこして緊張をほぐし。それから、スープを見たり、嗅いだり、クレーに思いを巡らせたりしながら、スープを味わう。
③食材とレシピを考える…どんな食材が入っているのかを考えて、画用紙に書き出し、チームで話し合ってレシピを決める。
④作る…自分たちで考えて選んだ食材を、参加者それぞれが1つ、調理を担当。切ったり、炒めたり、次の人にバトンタッチしながらスープを完成。味見と片付けは、みんなで。
⑤食べる…『クレーの食卓』の中で紹介された料理や百間ゆかりのデザート（大手まんぢゅう）と一緒に試食
⑥発表する…グループそれぞれの食材と作り方を発表

参加者コメント

・文学と食との組み合わせがどのようになるか楽しみでしたが、五感がすごく刺激され、いつもと違う脳を使った感じで、貴重な時間となりました。（40代 / 女性 / セラピスト）
・皆で意見を出し、謎解きをしながら、料理を分担して作るのは初めての体験で、とても楽しいイベントでした。（60代 / 女性 / 会社員）
・使用している食材を考え、それを調理するというミステリーもどきの体験が、とても新鮮で楽しめました。（60代 / 男性 /調理員）
・クレーという作家に興味を持つきっかけになりました。（30代 / 女性 / 会社員）

講師コメント

「自分たちの作ったスープが一番美味しかった」という声があったように、自分で作ると自分の好きな味になるのが面白い。今日、みんなで料理を作ったことを、友達や家族に話して、家でももう一度作ってみたり、今度は違うものを作ってみたりするきっかけになれば。普段の暮らしの中で、映画を見たり音楽を聴いたりするのと同じように、今日は料理をしてみよう、と思ってもらえれば嬉しい。（杉本）

ものを考えることと料理は似ているし、芸術も然り。人と出会い、人と一緒に考え、同じ時間と空間を過ごすことが、いかに素晴らしいかということを痛感した。20世紀前半は芸術や建築など、とても面白い時代なので、クレーを通じてぜひそれらに触れてもらえれば。また、クレーの描く絵は当時変わっていると受け取られただろうが、今の時代に改めて見直すと、どう感じるか。最近では、脳科学的に絵画を読み解くことと絵画を描くことの関係性の研究が進んでいるが、ぜひ新しい視点で、クレーの絵を見てほしい。（新藤）

テキスト：木下志穂

文化芸術交流実験室17

芸術文化の今 ソウルと岡山

日時：2018年12月24日(月)11:00〜15:00
開催地：岡山後楽園（岡山市北区後楽園1-5）
講師：多田淳之介（演出家、劇作家）
　　劉誠子［ユーソンジャ］（ソウルデザイン財団）

飛行機で1時間半という距離にある岡山とソウル。人の行き来も盛んですが、意外にそれぞれの芸術文化の現状は知らないもの。ここ数年のうちにオープンしたソウル市内の様々な文化施設や、そこで行われている意欲的なプログラムの紹介をユー・ソンジャさんに、また、ソウルと日本を行き来して演劇の活動を繰り広げる多田淳之介さんには芸術文化の草の根的な活動状況の報告などを聞きながら、岡山の今と照らし合わせていきたいと思います。ミニワークショップは演劇とデザインの各分野を体験します。

多田淳之介…1976年生まれ、千葉県柏市出身。東京デスロック主宰。富士見市民文化会館キラリふじみ芸術監督。青年団演出部。俳優の身体、観客、時間を含めた現象をフォーカスした演出が特徴。古典から現代劇、パフォーマンス作品まで幅広く手がける。富士見市を中心に、他地域、教育機関でのアウトリーチ活動、創作活動も積極的に行い、韓国、フランスでの公演、共同製作など国内外問わず活動する。おもな演出作品に『ロミオとジュリエット』『その人を知らず』『あなた自身のためのレッスン』『LOVE』『再／生』など。

劉誠子…イタリアのデザイナー、ブルーノ・ムナーリから影響を受け、20年間子供のためのデザイン展示、教育、ワークショップ、教具企画とデザインの仕事を主に続けている。現在はソウル市デザイン財団教育事業チーム マネージャー。子供、小中高生、先生対象のデザインプログラムを企画して DDPと東大門周辺地域と協力してデザイン教育を行なっている。

レポート

会場は、日本三名園のひとつ、岡山後楽園内の鶴鳴館。最初に、後楽園事務所長の野崎正志さんから後楽園と鶴鳴館の由来について解説いただきました。

会場は岡山後楽園の入り口すぐにある鶴鳴館

続いて多田さんから、ご自身の活動と韓国との繋がりについて紹介。普段は関東を中心に活動されていますが、韓国では、2008 年から年約 1 回のペースで作品を制作・上演しています。多田さんが韓国でまず驚いたのが劇場の多さで、東京 23 区合わせた劇場数が 130 なのに対し、ソウル市内にある大学路（テハンノ）という一角だけで 200 ほどもあるそう。若者の間では演劇鑑賞が当たり前の休日の過ごし方になっています。この背景には、韓国政府による文化政策があり、劇場を建築すると税金が控除されたり多様な助成を受けられたりできるのだとか。そのほか、韓国の劇場の様子やアーティストの暮らしぶりについても紹介がありました。最後に日本と韓国とで共通する課題を、独特の関係にあるからこそ、文化交流を介して一緒に考えていけるのではないかと展望を話してくれました。

韓国の演劇シーンを紹介する多田さん

次に劉さんから、ソウルデザイン財団と DDP（Dongaemun Design Plaza）について紹介がありました。ソウルは 2010年にユネスコデザイン都市に認定され、様々な文化政策が推進されています。2014年に東大門に開館した DDPはデザイン産業のためのプラットフォームを担う大規模施設で、空間活用デザインの提案や、若手デザイナーのスタートアップ支援など様々な事業を推進しています。また、小学校〜高校と連携し、DDPの建築デザインや歴史文化に関するコンテンツを利用したプログラムを実施。さらに「designer's map ddp」というスマートフォンアプリを開発し、ソウル市内にある無数の小規模な加工工場と若手デザイナーが繋がる仕掛けをつくっています。このアプリを用いたワークショップでは、デザインを一度もやったことがない学生たちが、自分たちの手で描いたデザインを工場に持ちこみ加工してもらい、仕上げは自分たちの手で行います。材料から加工までを目の当たりにすることで、ものづくりの面白さに目覚め、何度でもやりたくなるのだとか。おふたりから普段なかなか知ることのできない韓国の最先端の文化事業について詳しく伺え、会場の好奇心の熱量はどんどん上がっていきます。

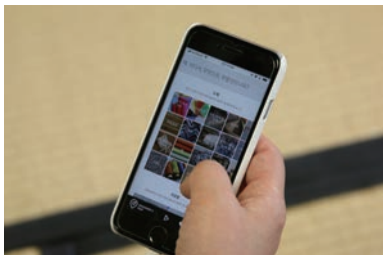
DDPの「トゥリームキット」を紹介する劉さん

ランチを挟み、いよいよワークショップです。劉さんによる廃材ワークショップは、各テーブルに廃材が分類された「トゥリームキット」を使用したもの。多田さんによる絵と音楽を使ったワークショップでは、人によって絵からどんな物語を感じ取るかが違うことがわかりました。最後に、音楽を聞きながらワークショップで作った自分の作品にタイトルをつけ、音楽と言葉とのズレや反応を楽しみました。

ヒト・コト・場所

岡山後楽園

今から約 300年前に当時の岡山藩主池田綱政が作った庭園。綱政の時代には園内の建物の座敷から眺望を楽しむという趣向だったが、その後山や水路が整備されたり、田畑がつくられたりと時代ごとの藩主の好みや社会情勢によって景観が変化していった。昭和に入り、台風や空襲で園内の建物の大半が消失するも、江戸時代の絵図などに基づいて復旧され、当時の姿を変えることなく今日に受け継がれている。1952（昭和 27）年に特別名勝に指定、金沢の兼六園、水戸の偕楽園と並ぶ日本三名園。提供：岡山県



designer's map ddp

ソウルデザイン財団が独自に開発したスマートフォン向けアプリケーション。東大門周辺に数多く存在する小規模で多種多様な加工工場と、建築・デザイン・ファッション業界に携わる人とが繋がれるよう、素材別に加工工場の情報を一覧化。最初の画面で、素材から選ぶか、地図上で検索するかの2パターンが選べる。探したい素材をクリックしたら、該当する工場の情報がリストアップされる。金属・木材・プラスチックなど 139の素材の情報が入っている。工場は、デザイナーが個人で発注してサンプル作成に対応可能な工場のみを抽出している。現在、韓国語版のみで展開中。

ワークショップ

劉さん

①5人〜6人ごとにグループにわかれる。
②7種類の廃材が分類されて入った「トゥリームキット」が各テーブルに配られ、素材を一つずつ取り出してよく観察する。
③7種類の素材を、自分なりのルールで用紙に並べて貼り付ける。使う素材の量や配置は自由。
④それぞれの制作した作品を発表。

多田さん

①スライドに絵が2枚投影され、流れる音楽がどちらに合うか考えながら聴く。
②会場でどちらの絵か挙手し、その理由を話し合う。
③絵の枚数を増やしたり、絵や音楽の種類を変えたりして感じ方の違いを楽しむ。
④音楽を聞きながら、前半のワークショップで作った作品にタイトルをつける。

参加者コメント

・韓国には以前から興味がありましたが、文化事情がより深く知れてとても面白かったし、ワークショップもどちらも楽しめました。（40代 / 男性 / 書道家）
・先日韓国へ行ったばかりなのですが、DDPの近くまで行ったのにスケジュール的に行けず、次回はぜひ行ってみたいと思いました。韓国ではかなり高度な教育が進んでいるのだなと感心しました。（40代 / 女性）
・なかなか知る機会の少ない韓国の演劇事情を面白くお聞きしました。DDPの建築と活動について初めて知りました。（60代 / 女性 / 会社員）
・ワークショップでは人によって発想が全く違い、思いがけない発見がありました。（50代 / 女性 / 会社員）

講師コメント

最初によく素材を観察することで、様々なアイデアが出ていたように思います。同じ材料でも、どんな基準にするかによって貼っていく位置が違う。ひとりだけではなく、みんなと一緒に何かを作ると、最初に感じた印象が膨らんで様々な表現ができる。参加者はよく観察して、それぞれにいろんな物語が表現できていたと思います。これからのワークショップのヒントになりました。（劉）

作品にタイトルがつくと見方が変わるし、作った時の気持ちと別の要素が入ってずれるのが面白い。今回一緒にやったワークショップは、「どこが演劇なの？」と思われるかもしれないが、見えないものを見せる、見えなかったはずのストーリーを見せるという点で、とても演劇的。今回、韓国の話題で繋がる講師ふたりだったが、韓国と日本とは距離が近いからこそ見れるものがたくさんあると思います。今回受けた刺激をどこかで恩返ししたい。岡山には何度か訪れているが、また是非来たいと思いました。（多田）

テキスト：木下志穂

岡山県内の気になる「ヒト・コト・場所」をアンケート

文化芸術交流実験室の参加者から寄せられた、岡山県内で気になっているヒト・コト・場所をリスト化しました。
※ 実験室で紹介したもの、抽象的なもの、詳細不明なものは省略しています。

五十嵐英之さん	倉敷芸術科学大学の教授・アーティスト。自閉症者と絵画を通したコミュニケーションに着目している。
イコットニコット	2018年にドレミの街からリニューアルオープンした、ツタヤブックストアなどが入る岡山駅前の商業施設
石川康晴さん	岡山出身の実業家。岡山市内での文化事業も行い、岡山芸術交流のプロデューサーも務める。
石田直さん	岡山を中心に活動する染織のアーティスト。ストールやマフラーなどの販売なども行う。
S-HOUSE Museum	SANNA設計による個人住宅を改修した美術館。10年間作家を固定し、毎年新作を加え展示し続けている。
岡山芸術交流	岡山市内で3年ごとに行われる現代アートの国際展。2016年に続き、2019年秋に第2回が開催される。
岡山史料ネット	岡山大学文学部日本史研究室を拠点にする、災害の被害を受けた歴史資料の保全に取り組むボランティア団体
岡山県立図書館	1999年に閉校した岡山市立丸之内中学校の校舎跡地に建設され、2004年に開館した県立図書館
オカベマキコさん	岡山市内にアトリエを持つガラス作家。アクセサリーやオブジェ、照明などを制作している。
岡山天文博物館	浅口市立の天文台。2018年にリニューアルオープンした。国立天文台岡山天体物理観測所も併設されている。
岡山朝鮮初中級学校	1945年に設立。朝鮮学校の閉鎖命令下でもあらゆる方法で授業を継続。1967年に学校法人の認可を受けた。
岡山電気軌道の路面電車	100年以上続く路面電車。2016年に工場の一角を「おかでんミュージアム」に改修、模型などを展示
おひさま	岡山を拠点に、発育に不安のある子どもの自立を支援し、放課後等デイサービスを提供する児童福祉施設
語らい座大原本邸	もともと倉敷の地主である大原家が暮らしていた住居。現在は、大原家の生き方を感じることができる施設に。
川上幸之介さん	倉敷芸術科学大学で講師を務めるなど、研究者としての活動もするアーティスト
川埜龍三さん	作品の世界観を様々な形態で表現するアーティスト。《犬島の島犬》など、市民を巻き込み作品制作している。
旧内山下小学校	校庭に国指定重要文化財の西手櫓がある。閉校した今もフェスやマーケット、展覧会等様々なイベント拠点に。
倉敷本染手織研究所	倉敷民藝館付属工藝研究所として昭和28年に設立された、仕事としての染織に励む工人を育成する学び舎
倉敷芸文館	1993年開館の多目的ホール・演劇ホール。倉敷の町並みに合うような白壁と石の外観が印象的
匙屋	木製スプーンを中心に生産販売する、ギャラリーとショップを持つ牛窓の製作工房
沢知恵さん	シンガーソングライター。2001年から国立療養所大島青松園でコンサートを毎年行い、2014年に岡山に移住
シネマクレール	1994年岡山市石関町に開館（2008年閉館）、2001年に丸の内に新館を開館したミニシアター
新岡山市民会館	2022年に完成予定の新市民会館「岡山芸術創造劇場（仮称）」。更なる演劇・音楽文化の発展が期待される。
スロウな本屋	店主がこだわって選んだ本が揃う本屋。ワークショップなども開催し、ひと・モノ・ことを繋ぐ活動をしている。
瀬戸内国際芸術祭	2010年より3年に1度、香川や岡山県の島々を会場に開催される現代アートの祭典
繊維産業	明治時代に紡績会社が次々と岡山で設立され、学生服やジーンズは岡山の地場産業として全国的に有名になった。
創業スクール Homing	都会から岡山に戻りビジネスをするUターン者向けに講座や創業相談窓口などを提供しているスクール
大樹山蔭凉寺	岡山市北区の臨済宗妙心寺派の仏教寺院で、ワークショップ、ヨガ講座、ライブなどのイベントを多数開催している。
津山自然のふしぎ館	動物のはく製を展示する自然史博物館。珍しい動物のはく製が多い事や、創設者本人の臓器の展示で有名
備前焼	釉薬を一切使用せず高温で焼成する、備前市伊部地区独特の焼き物
平川忠・土窯プロジェクト	備前焼作家の平川忠が行うプロジェクト。中世の備前窯の構造である土壁に注目し、その復元を行っている。
平成 30年 7月豪雨	県内で61人が犠牲に。総社や倉敷を中心に被害を与え、被災者への対応や後世への記録が課題となった。
奉還町商店街	明治時代から続く商店街。懐かしい街並みが残りつつも、新規出店が増え若い客層を獲得している。
PORT ART&DESIGN TSUYAMA	市指定の重要文化財である大正期の建築、旧妹尾銀行林田支店を改装した津山市のアートギャラリー
松村圭一郎さん	岡山大学准教授の文化人類学者。富の所有や分配、貧困と開発援助、海外出稼ぎなどについて研究している。
美咲町の国際文化交流	岡山県のアーティスト滞在・交流事業の一環で行われている、美咲町のアーティストインレジデンスなどの活動
美作三湯	湯郷温泉・湯原温泉・奥津温泉の3つの名湯からなる、古くから続く西日本有数の温泉地
三宅商店	江戸時代にからの町家の趣が残る建築を持つ、倉敷の喫茶店。ギャラリーやイベント会場としての一面も持つ。
山の上のロースタリ	牛窓オリーブ園の中にある、豆にこだわったコーヒーと瀬戸内海の風景が楽しめるカフェ
Ricca	総社市にある園芸店。植物のある暮らしをもっと身近に提供することを目指している。

メーリングリスト開設

参加者の交流や情報交換の場

おかやま文化芸術アソシエイツに関する情報配信はもちろん、参加者自身の文化芸術活動や、おすすめのイベント情報、活動のための募集情報などを投稿することのできるメーリングリストを開設。「文化芸術交流実験室」参加者を中心に加入をうながしました。

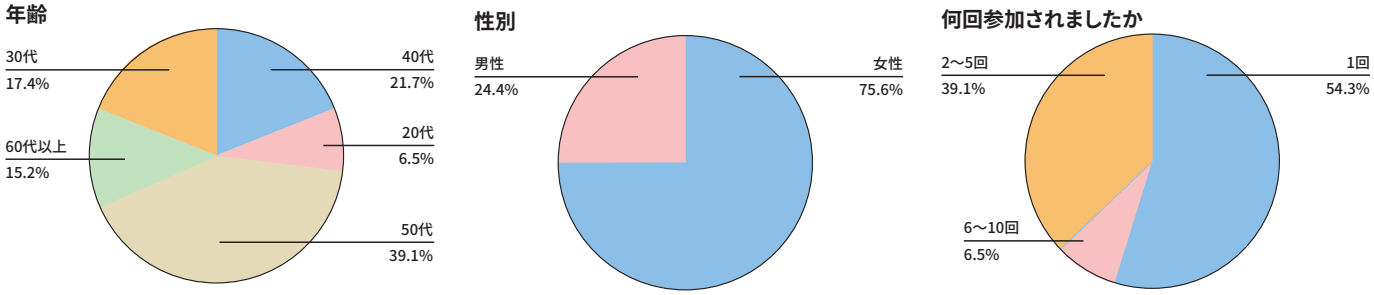
メールアドレス：o-associates@freeml.com　※ join-o-associates.x8hN@ml.freeml.com宛に空メールを送信することにより誰でも参加可能です。
対象者：「文化芸術交流実験室」参加者、運営関係者、講師を中心とした希望者
参加者数：54名（2019 年 3 月末現在）

アンケート分析

参加者の傾向や反応をアンケート

文化芸術交流実験室の参加者には毎回アンケートを実施していましたが、第 1 回〜第 17 回（平成 29 年度〜 30 年度）の終了後にあらためて全回の参加者を対象にアンケートを実施。傾向や反応、参加後の動向を探りました。

実施方法：メール送信により、ウェブフォームから回答を依頼
回答期間：2019 年 3 月 16 日〜 26 日
回答数：47 件（回答率：23%）



1. 参加をきっかけに、興味を持った分野に関する活動

- 関連するイベントへ参加するようになった。（4 件）
- 講師の活動について、インターネットなどで調べるようになった。（1 件）
- その分野に身を置きたいと思い、転職することになった。
- 自らの表現や制作活動に学んだ事柄を生かした。（3 件）
- 関連のあるインターネット記事等を読むようになった。（2 件）
- 関連のある図書、新聞記事等を読むようになった。（4 件）
- 各地の建築物を訪問するようになった。
- イベントに参加したことを各所で報告し、興味を持った方を案内した。
- 地域のお店に行く機会が増えた。
- 紹介いただいた本や音楽を楽しんだ。
- 取り壊される家をスケッチした。
- 手づくりの可能性を感じて、既製品を手にしてしみじみと眺めた。
- 知ったことを更調べ、身近のモノ・コトを新たな角度から見るようになった。
- 訪れた場所に興味をもち、まち歩きをした。インターネット記事で紹介した。

2. イベントの開催時期、場所などについて

- 講座数を増やしてほしい。
- 午後の 3 時間程度の開催の方が参加しやすい。
- 時期や曜日が異なっていた方が、都合に合わせて参加しやすい。
- 屋外開催の場合は、暑くも寒くもない時期が良い。
- 岡山市内中心部だと参加しやすい。（2 件）
- 県内広域で開催いただいた方が良い。（2 件）
- 色々な面白い場所で行われるのがいい。（5 件）
- 県北での開催を増やしてほしい。（2件）
- 県外含む色々な地域で開催してほしい。
- 普段入れない場所に入れるのは面白い。
- ランチの設定も地域の再発見につながって良い。
- 自動車を持っていないため、公共交通機関を使用できたら嬉しい。
- 豪雨災害の影響があったが、日程は変えず場所を変えて欲しかった。

3. おかやま文化芸術アソシエイツに期待すること

- 様々な分野の催し（2 件）
- 展覧会などでは分かりにくい専門的な事にも触れる事ができたら嬉しい。
- 一般の人が芸術をより近く感じられるような企画
- 新たな視点や異分野でのコラボレーション。（2 件）
- 刺激的な活動
- ふだん日の当たらない分野、発見がある分野や場所を取り上げて欲しい。
- 多様な人との出会い。似た人たちとの出会い。
- ワークショップ等のイベント（2 件）
- 身体表現や踊りにかかわること
- 専門の方のお話しに触れ、自分の興味を広げる機会
- 話題になって興味のある団体や個人の活動を紹介する機会
- 美術館や図書館等の展示や企画などの仕組みや取り組みについて。
- 古代吉備の國の歴史、建造物群等
- 地域おこし協力隊の活動内容
- 地元の本当に美味しいもの（食材、料理法、地酒に合うあてなど）
- わかりやすい情報発信
- 集まった方々と交流できる機会

所感

参加者の傾向については、各回 20 〜 60 代まで幅広い世代が見受けられましたが、回答に現れている数字としては 50 代・60 代以上が半数をしめていました。項目 2 の中で参加のしやすさが求められる回答があったり、回によっては 20 〜 40 代の参加率が高い回もあったため、休日の昼をはさむ長時間の設定が、働き盛り・子育て現役世代には参加し難かったことが推察されます。

そのような中で、複数（2 〜 10 ）回参加された方が半数近くを占めていますが、項目 1 〜 3 の中で随所に様々な内容、場所での開催を評価する声が見られることからも、実験室の特徴であった多様な内容や会場の設定などの形式自体が影響したものと考えられます。

項目 1 では、興味を持った分野や人などについて図書やインターネットで調べてみるにとどまらず、イベントに参加したり、自らの活動に生かしたり、他人にすすめたり、転職をするなど様々なレベルで具体的な活動につながっていることがわかりました。項目 2 では、特徴的な開催日時や場所の設定について、それ自体が面白いという意見がある一方で、参加のしやすさも求められているなど意見が二分していることがわかりました。項目 3 では、実験室に限らず多様なご意見をいただきました。「おかやま文化芸術アソシエイツ」の認知を広めること自体を試みながら、活動全般の充実を図ることが求められています。

全国の地域アーツカウンシルの現状とおかやま文化芸術アソシエイツへの期待

朝倉由希

文化庁 地域文化創生本部 総括・政策研究グループ 研究官

岡山県文化連盟 アドバイザー

地域で文化政策を推進するため、専門人材を備えた体制が必要であるということは長年指摘されていたが、近年「地域アーツカウンシル」という言葉とともにその議論が過熱している。背景には、2020年のオリンピック・パラリンピック東京大会がある。文化プログラムを全国で推進するにあたり、各地域にそれを担う機関が必要であり、また文化プログラムを一過性のもので終わらせず、2020年以降地域の文化政策が確実に展開されていくためにしっかりした体制を今構築すべきということである。文化庁としてもその動きを後押しすべく、平成28年度より「地域における文化施策推進体制の構築促進」という補助メニューを新設した。事業そのものへの補助ではなく、文化芸術政策の立案、調査研究、情報発信等を実施する体制の構築を促進する取組が補助対象となっていることが特徴で、これまで10自治体がこの補助金を活用して体制構築に取り組んでい る。岡山県もそのひとつである。

しかし「地域アーツカウンシル 」とは何かということについて、 日本で明確な定義があるわけではない 。実際、全国の先行する取り組みも、専門性や継続性を持つ組織の構築を目指すということはおおむね共通しているといえるものの、予算規模や人材、事業内容は様々である。ひとつの正解があるわけではなく、ましてやアーツカウンシルさえ設立すればすべてが解決するというような魔法の道具でもない。大切なのは、何のために、どのように取り組むのかを、行政や文化機関等の関係者でよく議論し、地域の実情に合わせたあり方を構築していく姿勢である。

岡山県文化連盟は全県の幅広い文化関係団体を網羅するネットワークを構築して設立された組織であり、このような組織の存在自体が大変稀有なものである。その連盟が、 時代に即しこれからの岡山の文化にとって必要な展開を考えたとき、アーツカウンシル的機能を付加するという方向性は時宜にかなった適切な判断であったと考える。岡山版アーツカウンシルである「おかやま文化芸術アソシエイツ」は、 限られた予算の中で、実に地に足の着いた事業を展開してい る。

その中心的な企画である「文化芸術交流実験室」は、岡山県内の文化芸術資源に光をあて、分野を横断した内容のレクチャーとワークショップを行うというもので、県内文化資源に関する調査研究と情報の整備・ 発信、人材育成等の要素を複合的に併せ持つ。実験室の内容は、音楽や美術等の芸術ジャンルにとどまらず、 伝統芸能、建築、教育、福祉など多岐にわたり、あるいはそれら異なる分野を掛け合わせたユニークな切り口のものばかりで、いかに多彩な内容かは報告書から感じ取 っていただけるであろう。

岡山県は、備前焼などの工芸品をはじめ、 個性あふれる地域文化が豊富に存在する地域として知られているが、 まだまだ掘り起こされていない魅力ある文化がたくさん存在する。地元にいると意外とその価値を見落としてしまいがちであるが、 実験室は様々な角度から県内の文化芸術資源に光を当て、異なる分野をつなぎ、岡山の文化の魅力を再発見させてくれる企画である。

筆者も何度か参加し、岡山の文化の奥深さを体感させていただいたが、注目すべきは、参加者の層の多様さである。分野横断的な企画であるがゆえ に、参加者も様々な属性の方が集まっていた。 県北等の交通の便が必ずしも良くない場所での開催時にも、 県内外から定員を超える参加者があり、 知的刺激を求める人々のアンテナに引っかかっていることを感じた。

また、実験室は各回定員が30名と比較的少人数に設定されており、参加者同士の対話が重視されている。午前から午後にかけて体験を共有することにより、参加者同士のつながりが生み出されている様子が見て取れた。実験室で取りあげられる素材は、身近で日常にあるものの場合が少なくない 。参加者同士の対話から発見があったり、見方や組み合わせを変えることによって新たな感覚が生まれたりすることで、「文化はもっと身近なもので誰もが創造的に生きるための種になるのだ」と感じることができる。文化を特別な人のものとするのではなく、 日常を創造的に生きるヒントに満ちた企画であると感じた。

実験室の事業自体は地道なものであるが、このような岡山の文化や人に出会う密度の濃い取り組みが県内各地で行われることで、県内の文化 の魅力 の再発見・再認識と外部への発信につながっていくのではないだろうか。実験室の成果は記録としてＷｅｂでも発信されている。この記録自体が、岡山の豊かな文化を発信する土台となるはずである。一過性 のイベントは、その時だけの盛り上がりで終わりがちであるが、地道に掘り起こしアーカイブした文化芸術資源や、それを通じてつながった人のネットワークは消えることはない。

2020年をひとつの契機に、 日本の全国各地の風土に根差した多様な文化を発信しようという機運が高まっている。文化こそが地域独自の魅力 であり、 持続的な発展の礎である。既存の文化団体ネットワークを活用しながら、 新たな幅広い視点で岡山の文化芸術資源を掘り起こし、文化 と様々な分野をつなごうとするおかやま文化芸術アソシエイツの試みは、 少しずつかもしれないが確実に、岡山全体の発展に寄与するものとなるだろう。この取り組みの意義が広がり、継続していくことを願う。

研究会・文化プログラム認証受付等

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に向けた文化プログラムの周知と参画の促進及びbeyond2020プログラムの認証受付、文化団体等の活動に対する助言や支援、文化活動に係る研究会・勉強会・講演会等を実施しました。

『NPO活動』官民合同資金調達説明会&相談会

［備前地域］
日時｜2018年9月24日（月・祝）13:30～17:00
開催地｜岡山県立図書館 多目的ホール、サークル活動室

［備中地域］
日時｜2018年10月18日（木）13:00～16:30
開催地｜倉敷市立美術館 第2会議室

［美作地域］
日時｜2018年10月24日（水）13:30～16:30
開催地｜津山市総合福祉会館 大会議室

県内文化芸術関係公益法人情報交換会 アートマネジメント研修　共催：公益財団法人福武教育文化振興財団

日時｜2018年5月18日（金）14:00～17:00
開催地｜岡山県立美術館 講義室
講演｜地域の課題、アートの可能性と評価
講師｜大澤寅雄（株式会社ニッセイ基礎研究所 芸術文化プロジェクト室）
参加｜19団体37名

日時｜2019年2月19日（火）14:00～17:00
開催地｜岡山映像ライブラリーセンター 会議室
講演｜価値を紡ぐアーカイブ
講師｜橋本誠（アートプロデューサー、一般社団法人ノマドプロダクション 代表理事）
参加団体｜16団体27名

公益財団法人福武教育文化振興財団 2018年度 教育文化活動助成贈呈式・成果報告会・交流会での相談ブース出展

日時｜2018年9月1日（土）13:30～17:00
開催地｜岡山プラザホテル 延養の間

文化プログラム（beyond2020）の認証受付

beyond2020プログラム 認証状況

区分	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度
全体（※1）	157	328	–	–
うちアソシエイツ受付分（2017.8.31～）	78	321	–	–
うち県文祭事業	79	153	–	–
うちその他文化連盟申請事業	28	37	–	–

※1　2019.3.29内閣官房まとめ+アソシエイツ受付未反映分

東京2020参画プログラム（応援文化オリンピアード）認証状況

区分	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度
全体（※2）	69	64	–	–
うち県事業	2	4	–	–
うち県文祭事業	51	40	–	–
うちその他文化連盟申請事業	16	20	–	–

※2　2019.3.29「Culture NIPPON」HP掲載情報+文化連盟申請実績（2019.3.29まで）から

監修 …… 大月ヒロ子
編集 …… 高田佳奈、橋本誠
デザイン・制作 …… 安藤次朗［LOVE AND PEACE］、一般社団法人ノマドプロダクション
発行 …… 公益社団法人岡山県文化連盟　〒700-0814 岡山市北区天神町8-54 岡山県天神山文化プラザ内
TEL …… 086-234-2626
FAX …… 086-234-8300
URL …… http://o-bunren.jp/